

41700

教科書文庫

4
810
41-1929
20000 40729

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



和 昭
本 讀 語 國
十 卷

和 昭 式 社
天 癸 院 書 國 商 京 東



文部省檢定
昭和四年一月十六日
中學校國語科

教科書文庫

4

810

41-1929

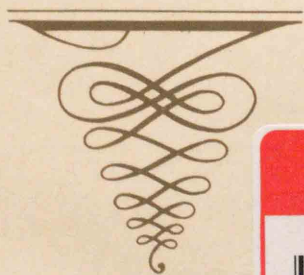
2000040729

資料室

375.9
Sa 19

和 昭
本 讀 語 國
十 卷

笹川種郎 文學博士
關根正直 文學博士
共 著

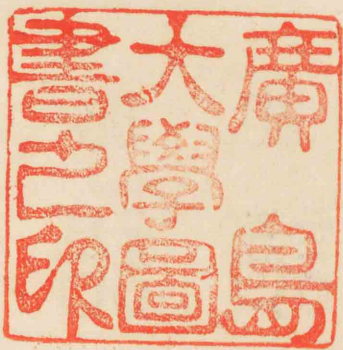


広島大学図書

2000040729



株式會社
東京帝國書院發行



目次

一	體驗と讀書	阿部次郎	一
二	十九世紀研究	島崎藤村	七
三	天地の温情	綱島梁川	二二
四	芳宜園大人を祭る	村田春海	二五
五	死と永生	高山樗牛	一九
六	噫伊藤公	徳富蘇峰	二四
七	わが夢		三〇
八	文藝と人生	菊池寛	三五
九	四季		四五
	一月の夜半	松平樂翁	四五
	二つりかばり	卜部兼好	五〇

目次

一

三 春はあけぼの

一〇 造化の隠喩

清少納言 五

一一 小松内府

坪内逍遙 五

一二 世界の四聖

平家物語 三

一三 夕占問 (その一)

高山樗牛 三

一四 夕占問 (その二)

谷崎潤一郎 五

一五 法成寺

榮華物語 六

一六 光あれ

姉崎正治 一〇

一七 古文寸錦

一〇七

一 人やりならぬ道

十六夜日記 一〇七

二 旅寝の月

東關紀行 一〇九

三 香爐峰の雪

枕草子 一一

四 わが宿

土佐日記 一一

五 小野の深雪

一八 藝術の三昧境

伊勢物語 二四

一九 不死の薬

厨川白村 二五

二〇 不盡山

竹取物語 三三

一 望不盡山歌

山部赤人 三九

二 詠不盡山歌

三三

二一 羽衣

觀世流謠曲 三三

二二 能樂論

小宮豊隆 四〇

二三 まさされる寶

萬葉集 四四

二四 菅公の左遷

大鏡 四九

二五 明・淨・直

五十嵐力 一五

二六 日本文學

芳賀矢一 一五



羽衣

(筆谷等觀筆)

(第二十一課參照)

目次終

目次



和昭
國語讀本 卷十

一 體驗と讀書

阿部次郎

吾々の生活の發展の最初の地盤となり、吾々の思索の第一の出
發點となるものは、何であるか。それは吾々自身の體驗である。
吾々自身の體驗の外には、何物もある事を得ない。吾々の最初の
體驗は、固より完全なものではないが、その中に隠れてゐるものを
明るみに引出し、その中に潜んでゐる矛盾と戦を重ね、その中に具
はつてゐる内面的傾向を、次第に推進めることによつて、吾々の生
活は始めて發展し、吾々の思索は始めて眞理に接近する。若し吾
々が、吾々の生活に關する眞理の標準を、例へば物理學に於けるが

如く、自己以外に固定した尺度に求めるならば、吾々は何時まで經つても、そんなものを發見することが出來ないであらう。吾々は、永遠にたゞ與へられたものを盲信するか、もしくは永遠に懷疑の淵に沈んでゐなければならぬであらう。

輕信と懷疑とは雙生兒である。無きものをあると考へるのは輕信である。眞理を求めるのに、最初からそれが無いときまつてゐる方面を捜し廻つて、永久に無いと言つて騒ぎ立てるのは懷疑である。幻の上に、その思想の根柢を築かうとしてゐる點においては、兩者共に同様である。生活においても、思索においても、假初にも堅實な歩を始めようとするならば、吾々は自分の體驗を信じて、これを學び知らなければならぬ。讀書の價值も亦この信念の上に立つて、始めて發揮されるのである。

この信念を基礎としない時、讀書は吾々にどのやうな弊害を與

へるであらうか。第一に、それは善惡・美醜・正邪に對する純朴な本能を紊して、これを混亂させ、これを麻痺させる。全然文字を知らぬ田夫・野人が、半可通の讀書子よりも、人情の美醜を解し、善惡・正邪に對して、彼等一流の判斷を持つてゐるのは、彼等がとにかく讀書によつて迷はされない本能を持續してゐるからである。第二に、體驗の根柢を缺いてゐる讀書は、吾々の思考力を薄弱にする。吾は雑多な意見を聞きかじることによつて、自分自身の判斷のない人間にされて了ふ。さうして第三に、吾々は前に言つたやうな種々の理由によつて、結局吾々の生活そのものの統一を奪はれ、生活そのものの力を失ふやうな、恐しい破目に陥る。吾々の生活には、踏みしめるべき大地もなく、歩み出すべき出發點もないものとなつて了ふ。

この點において、誤れる讀書のために、現代の生活が如何に損は

れてゐるか、他人事ならぬ吾々自身の問題として、吾々は深く省みるところがなければならぬ。吾々は他人の無學を嘲るまへに、先づ多少の學問によつて、却つて自分自身が馬鹿になつてゐるやうな事はないかといふことを考へてみる必要がある。生活の狭いことは決して喜ぶべきではないが、狭くても自分の生活を持つてゐる者は、凡そ自分の生活を持つてゐない者よりも、はるかに勝つてゐる。

併し、粗野から産まれたものよりも、教養ある敏感から産まれたものの方がよいことは言ふまでもない。無知は吾々の生活を狭くし、吾々の思想を偏らしめ、吾々と他人との交通を困難なものにする。吾々が最高の度まで、吾々の中に潜んでゐる力を發揮しようとするならば、他人の體驗を通して、自分の局限された一生の中に觸れ得ないやうな體驗をも味はひ、他人の思索によつて自分の

思索を豊富にし、かくして一人の生涯の中に、千萬人の生涯を攝取することを心がけなければならぬ。

こゝにおいて、讀書の意義は甚だ重大となる。書を読むと讀まぬとは、第一義において人間の價値を左右するものではないが、それは深く人間の價値と關係して、その向上を大いに助ける。正しい道さへ踏みはずさないならば、書物は讀めば讀むほどよいものである。さうして、讀まなければ讀まないほど悪いものである。

たゞ讀書の意義は、吾々の體驗を基礎としてのみ成立つものであるとすれば、どんな良書も、此方の體驗が足りないかぎり、十分に理解することが出来ないのは止むを得ない。特に偉人が、その一生の體驗と思索とを籠めたやうな大作になると、それは吾々の體驗と思索とが、大きくなればなるほど、何處までも益、大きく見えるであらう。幾度讀みかへしても、常に新しい味を吾々に味ははせ

るであらう。

この意味において、吾々が本當に良書を理解しようと思ふならば、吾々は先づ自分自身の生活を大きくしなければならぬ。吾々が全力をつくして考へたり味はつたりしても、とても理解し得ないやうな書に遭遇したならば、吾々は暫くその書をはなれて、直接の人生に歸つて行くがよい。さうして、其處で得たものを携へて、適當の時期を見計らつて、再び書物に對ふがよい。その時、吾々が直接の人生から携へて來たものは、その書物を理解する爲に大いに裨益することがあるであらう。自己の成熟を待たずに、無闇にこれにかじりつくのは、極めて愚策である。自然科学の知識の根原が自然にあるやうに、人間智の根原はすべて直接の人生にあることを忘れてはならない。

書を讀むとは心を讀むのである。自己の心を讀むことを知ら

ぬものが、どうして他人の心を讀むことが出來よう。(人格主義)

二 十九世紀研究

島崎 藤村

フランスの旅にあるころ、私はパリーの客舎の方に身を置いて、遠く自分の國をふりかへつて見るやうな靜な時を見つけることがよくあつた。わが國における十九世紀といふものに、興味を持ちはじめたのもあの旅であつた。曾て私は、その心持を故國宛の旅のたよりの中に、次のやうに書きつけて見たこともある。

もしわが國における十九世紀研究ともいふべきものを書いてくれる人があつたら、いかに自分はそれを讀むのを樂しむだらう。明治年代とか、徳川時代とかの區劃はよくされるが、過ぎ去つた一世紀を纏めて考へて見ると、そこに別様の趣が生じて來る。まづ本居宣長の死のあたりから、その時代の研究を讀みたい。萬葉の

喜多川歌麿
 本姓鳥山
 名は信美
 有名な浮世繪師
 (文化二年歿
 年五十三)
 皆川淇園
 名は恩
 通稱文藏
 京都の儒者
 (文化四年歿
 年七十四)
 式亭三馬
 本姓菊池
 名は太輔
 江戸の小説家
 (文政五年歿
 年四十八)
 爲永春水
 名は貞高
 江戸の小説家
 (天保十三年歿)

研究、古代詩歌の精神の復活、國語に對する愛情と尊重の念、それらのものが、いかばかり當時に目ざめて來た國民的意識の基礎となつたかを讀みたい。一方には、あの時代の初において、喜多川歌麿も歿し、皆川淇園も歿し、上田秋成も歿し、十八世紀の特殊な藝術が、次第に式亭三馬とか十返舎一九とか爲永春水とかあるひは歌川派の畫家の群とかの寫實的傾向に變つて行つたことを讀みたい。一方には、聖堂を學問の中心として、文藝趣味・道德の上に、支那の憧憬があるかと思へば、一方には蘭學の研究などが非常な勢で起つて居る。十九世紀の初期を考へると、舊いものと新しいものとが雜然同棲して居る。それを委しく讀んで見たい。「組織的な西洋の文物を受けいれようとしてから、まだ漸く四五十年だ。」ともかくもその短期の間に、今日の新しい日本を仕上げたのだ。かういふ人もあるが、それはあまり卑下した考へ方と思ふ。すくなく

高野長英
 蘭方醫
 陸奥の人
 (嘉永三年歿
 年四十七)

も百年以前の前半期を、殆どその準備の時代であつたと見ねばなるまい。蘭學者達が來るべき時代のために地ならしをしていつた跡を、委しく讀んで見たい。頼山陽といふ人も、あの時代には見のがせない代表的の人物であつたらう。あの人の書いたものは随分混りけの多いものとしても、一代の人心をチャームしたことはあらずはれまい。けれども山陽にはまだ餘程十八世紀の残つたところがある。渡邊華山・高野長英・吉田松陰等になつてくると何となくそこに武士的新人の型を見る。その情熱においてはより熱烈であり、その思想においてはより實行的であり、その學問においてはより新しいものとなつて來てゐる。反抗・憤怒・悲壯な犠牲的精神。あの人たちの性格を考へると、どうしても十九世紀でなければ見られないやうな激しい動搖と、神經質と、新時代の色彩を帯びたものがある。そんなことなぞが詳しく書いてあつて、

美妙齋
 姓は山田
 名は武太郎
 明治時代の小説家
 (明治四十三年歿、年四十三)

それを讀むことが出來たらばと思ふ。わが國の十九世紀は、舊い物が次第にすたれていつて、新しい物がまだ眞實に生まれなかつたやうな時だ。すべての物が統一を欲して、叫びをあげてゐたやうな時だ。その中で、士族といふ一大階級が滅落していつた。幾何の悲劇がそこに醸されたらう。それを讀んで見たい。二葉亭・美妙齋などはじめた言文一致の仕事、國語の統一といふ上から論じた物を讀みたい。新しい詩歌が、僅に頭を持上げたのも漸く十九世紀末の事である。異郷の旅にきざした私の心持は、歸國後もながく變らずにあつた。前世紀とは言つても、あの時代に起つて來てゐることは、皆私達に直接關係の深いものばかりである。ある意味からいへば、私達はそのから出發してゐる。あの暗い時代をもつと探つて見るといふことは、今日の私達に取つても、興味深いことではなから

うか。(春を待ちつゝ)

三 天地の溫情

綱 島 梁 川

杉の梢を高く離るゝ秋の空、何ぞ超脱の氣象饒かなる。一念の

秋 景



塵をとゞめざる秋の潭、何ぞ淵黙にして智慧を藏するの深き。星を洞觀の眼と開き、雲を葛巾の帽と戴き、紅蓼・白蘋の裳裾輕げに、あるは樹間の聲を弄し、あるはひとり瀨氣流るゝ空明の野を行く。げに秋の姿ぞ、哲人・道士の高姿なりける。

見よ、その衣を。尾花が波、錦の杜、桔梗、刈萱、女郎花、さては芙蓉、紫苑、藤袴のいろ／＼に染め、いづる彩のかず／＼、目もあやなれど、あはれ春草の靡蕪、夏木の鬱蒼と比して、何ぞその楚々として、譬ふれば一衣の羅縠の風にも婆娑たる道士の羽衣に似たるぞや。

聽け、その聲を。滿野雨ふるが如き蟲しぐれの幽思、遠情は、人の心耳を澄ましめて、微妙の法音を聽くが如く、鏗々錚々として、金鐵皆鳴る風聲、樹聲、天籟、地籟は、直ちにこれ哲人の豫言、禪士の喝語として、我等が念々の觀省に資するものなからずや。秋を仰ぎてまづ想ふは哲人の姿なり。

哲人の世界は觀念の世界なり。積水の碧を湛へたる氣海、月光の清輝に漂へる露華、白葦、黃茅の丘野、蘆花、淺水の江湖、いづれか秋は空明一氣の中を流れざる。山の阿、水の涯、到る所寸翳の目を遮るものなく、によつぱりとうかび出でたる山、美しうくねりゆく河、

すべてこれ晶明、すべてこれ澄徹。げに萬有は秋に至りて、一箇の觀念世界を披展せるなり。あらゆる形式、あらゆる徽號の衣を脱ぎ捨てて、直ちに觀念そのまゝを赤裸々に露呈しきたる。

あらゆる形式、徽號の薰染を離れたる觀念如實の秋の姿は、一面また實在の躍々人に迫る姿なり。秋は實にその觀念化せる明瑩の姿を以て、人を壓しきたる。臙にうつる醉眼の春の月、あるは菜の花がくれ、打霞みゆく春の水の美、假象の世界はこゝに無くして、蔦紅葉の中より露はる、節くれだちし樹身、枯芝生より躍り出づる、偃蹇たる雲根、いづれか秋は人に迫る實在の力を示さざる。

吾等が哲人、秋の太虚の心を仰ぎ見よ。いづこにか、一點妄念の翳をつけたる。もしか、る翳のありとせば、それは遙かなる地平線上に、罪業の名残かすかなる斷雲の一片、二片のみ。而して、それだにやがて孤行しつゝ、低迷しつゝ、消え行くなり。哲人の清襟、時に

秋野

罪業の雲の徂徠せざるにあらねども、そは忽にして一碧の心に没し去つて、また何等の累をもとゞめざるなり。萬象を碧落の心に包みて、執せず惑はざる剛明一氣の姿は、われ唯秋の太虚にこれを仰ぐなり。嗚呼高いかな、秋の品性。



礎も千草の秋と生ひ亂れたる野邊の一日の暖かさ華やかさは、また一しほの風情ならずや。若草の媚態はなけれど、秋野の温情は、たとへばさた過ぎたる婦の操高く、心すゞしく、歸依慈愛の性深き

煙の如き豊草の春に引きかへて、秋野としいへば、人目も枯れがれるうらぶれ姿まづ目にうかべど、あはれ涸井斷

にも似たるかな。

想へば、我、尾花が秋の懷に抱かれて、えならぬ氣海のほひを身にしめつゝ、孤懷そゞろに遠く騁せにしをりく、一種言ひ知らぬ懷しさに心動きて、涙下りしこと幾たびなりしぞ。しかして我記す、そは極めて愉しき涙なりしことを。げに天地の温情は、秋の野にこそ高く脈うつとは知らるれ。(梁川全集)

四 芳宜園大人を祭る

村田 春海

こゝに文化の五年九月八日、平春海謹みて芳宜園の大人の奥津城の御前に、菊の初花一枝をたむけ、香の木一ひらを焚きて、うなねつきて申さく。あはれ悲しきかも。君はわれに十といひて一年のこのかみにおはすなるが、いまそのかみを思ひ出づるに、君はまさに盛の齡におはして、われはまだ童にてぞ侍りける。常に縣居

春海



通稱平四郎
江戸の國學者
眞淵の門人
(文化八年歿)
芳宜園
加藤千藤

縣居
賀茂眞淵

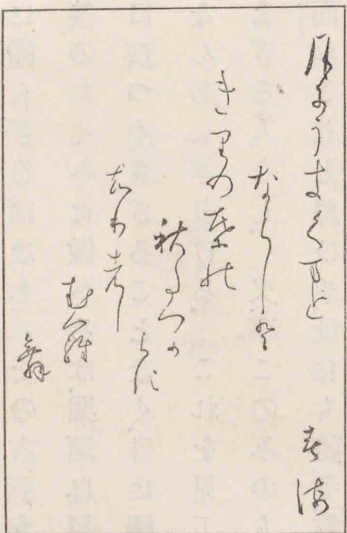
の庭に物まなびに行きかひたる時、あしたに参るとしては君のみは
かしのしりへに従ひ、ゆふべに罷るとしては君の御袖のもとに縋り
て、相うるはしみまつれること、親子はらからにも何か異ならん。

書讀むとては君を師とも尊み、
歌作るとては吾をおとゞひの
つらにぞ教へ給ひける。中頃
にして、君は仕の道に暇なくお
はし、我は世のさがにかゝづら
ひて、おのづから疎き方にも過
ぎつるを、君つかへをしぞき給
ひて後は、我も同じ巷に移り住
めば、花を尋ぬとては我道しるべをなし、月を思ふとては君が舟に
相乗り、憂き事も共に憂へ、嬉しき節も共に喜びて世にありふるわ



加藤千蔭

春海筆蹟



ざのまめごととあだごと、かたみにへだてなく、心をかはせるこ
と今に二十年、その初を繰返し數ふれば、相友たること既に五十と
せにぞ餘りける。世を、今後れ奉りて、いつの世にか相見ん、何れ
の時にかこととはん。常なきは
人の身のならひぞと知れど、これ
をいかでか歎かざらん、かゝるを
誰かはよく堪へん。あはれ悲し
きかも
文の林世々に衰へ、言の葉の道
日々に下りゆけるを、賀茂の翁世に出でて、今をすて、古に復り、青
雲の高き心しらひを求め、倭文機しづはの文あるみやびごとを貴みいへ
れど、くひぜを守り、舟にきだつくる輩、かれに泥みこゝにひかれて、
なほ怪しみがむる類は多く、たまあひてよくうけひく人なん稀

第三十期

なりしを、君ひとり心をおこして、普く諭し、廣く誘ひしより、近き人は目のあたりあひうづなひ、遠き人は遙に靡き來て、古ぶりの歌世に盛になりたる、これ誠に君の力によりてなり。

その自ら詠みいで給へる歌を見るに、古き調、新しき姿、とりとに備らざるはなし。その古をうつせるは、藤原寧樂の御世に及び、後のたくみに倣へるは、堀河鳥羽の御時に下らず。心に思ふ事は口につくさざることなく、目に觸るゝものは言葉に載せざることなんあらざりける。これを見て、たかきもみじかきも、めでたふとまざる人なし。又事このみの人は、その名を君に知られては、身の面おこしと思ひて、世にも誇り、君の一歌を得ては、價なき寶にもかへじといひてぞ、深く喜びける。

然るを今、黄金の聲忽ち止みて、玉の響再びきこえずなりぬるは、わがどちのなげきのみかは、大方の世の人のうれへともいひつべ

し。これをいかでか惜しまざらんか、るを誰かは慕はざらん。

あはれ悲しきかも。

わがかく言擧するを、泉の下にもさやかに聞召し、天翔りても遙に見そなはせとなん申す。(琴後集)

五 死と永生

高山樗牛

死は生きとし生けるものの免るべからざる運命なり。それ唯免るべからざる運命なり、故に又避くべからざる問題なり。されど、生を惜しむ人はあれども、死を惜しむ人は少なく、生について慮る人はあれども、死について考ふる人は稀なり。訝しからずや、如何にして生くべきか。これ人生の大なる疑問なり。然れども、如何にして死すべきかは、更に大なる疑問にあらざるか。吾等は歴史を讀みて、大いなる宗教の起るを見たり。されど、宗教とは

釋
迦

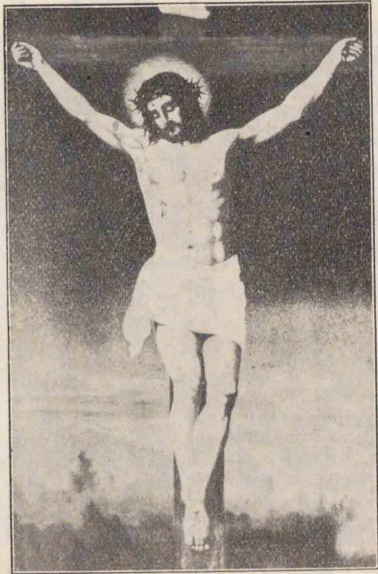


生きたがための教にあらざして、死せんが爲の悟なり。釋迦は人生の四苦に感じて、解脱の途を説きぬ。耶穌は同胞の宿罪を贖うて、永生の道を開きぬ。解脱や、永生や、死を外にして何の意義かある。最も賢き人の説ける哲學の旨趣も亦、これに外ならざるなり。天地人生の理法を明かにするは、人をして安心立命の地を得しむるにあり。安心立命とは、所詮は死を安からしむるの謂にあらずや。道徳は現世のためのみ存するものにあらず、名譽の不朽を思ひ、事

業の永遠を言はば、これ即ち死後の世界を言ふなり。あはれ、其の生を見て其の死を見ざる者は、人生の根本を遺れたるなり。死は、すべての物の終にして、又すべての物の始なればなり。されば人死を考へよ。死を考ふるは、即ち人生の目的を考ふるなり。死滅を考ふるにあらずして、永生を考ふるなり。夫の死生の優劣を争ひ、人生の價値を疑ふものは愚なるかな。吾等は生を知る、いまだ死を知らず、如何ぞ其の優劣を知らんや。人生の價値は絶對なり、他に比すべきものなし。厭世と謂ひ樂天と謂ふ、吾等其の何の意なるを知らず、吾等は唯人生の實在せるを知るのみ。されば、吾等は生きざるべからず、永遠に生きざるべからず。死は萬物の運命なり。されど、吾等は死を超絶して、其の永生を續けざるべからず。如何にせば、死して生くるを得んか。人生究竟の問題茲に集まる。

世に、神に禱りて永生を求むるものもあり。佛に願ふものは、人生の倏忽を歎きて、涅槃の寂寞を求む。されど、形態を離れて魂魄なきを如何にすべき。其の墳墓を壮大にし、金を鏤め、石に刻して、

十字架の耶穌



名の後世に傳はらんことを求むるものあり。されど、時はすべての物の破壊者なり。風雨幾歳、時移り人渝り、滄桑幾度か變轉して、墓標ひとり全きを得べしや否や。かくの如きは永生の道にあらざるなり。

まことの永生は、名によりて生くるにあらずして、事によりて生くるなり。儒教の存せるところ、今なほ孔子あらざるはなく、佛寺の建てるるところ、到る處に釋迦あり。耶穌は十字架にかゝれりと

雖も、今なほ基督教徒の命なり。楠公の史蹟に感激する者の胸には、楠公其の人の生命あり、蒸氣機關の動くところには、ワットの血液あり、電氣の線のかゝるところは、即ちフランクリンが永生の地にあらざるや。まことの永生は、時と共に深さを加へ、人と共に廣さを加ふ。されば一人の精神は千萬人の生命となり、河より海に、海より陸に、蕩々汨々として、遂に世界を動かさずんば已まざるべし。十九世紀の文明は、かくの如き幾多永生の結果に外ならざるなり。我が少年諸子よ、諸子は曾て死を考へしことありや。其の年の弱きを以て、早しとするなかれ。死を思はずして生くるは、空しく生くるなり。其の死をして憾なからしめんと欲せずして、ひとり其の生の完からんを望むは、これ目的なくして道を歩むなり。死を思ふは即ち永生を思ふなり。而して、最もよく此の問題を解釋したるものは哲人傑士なり。(樗牛全集)

伊藤公
名は博文
號は春畝
明治の元勳

伊藤公

六 噫伊藤公

徳富蘇峰



我が功名赫々たる伊藤公は、明治四十二年十一月四日國葬式終結以後、全く歴史的人物となるべきなり。故に、現在の經世家として吾人が敬意を表するは、唯この時を然りとなすなり。吾人豈に一言なくして已むを得んや。

然りと雖も、天下の伊藤公を頌するもの既に至れりつくせり。吾人は一切の字書より最も剴切の感觸を與ふべき文字を援き來らんとするも、却つてその蛇足たるを虞れざるを得ず。何となれば、伊藤公の勲業・功德について、言ふべきことまた言はんと欲することは、殆ど言ひつくして餘

蘊なければなり。

吾人が平生伊藤公の特質として敬服する主なる一は、その國體の大本を根據として、日新の趨勢に順應せんとしたるにあり。公は、實に皇室中心主義の信者にして、またこの主義が克く憲政の精

嘉永寺、横太宮、日東遊使
帝威隆、書樓明、書三杯酒
天下英雄在眼中

主敬山人

神と併立し得らるゝことを信じたる一人なりき。されば、保守黨より見れば、聊か危

険なる急進分子を交へたるの觀ありしも、急進黨より見れば、却つて幾分の保守的分子を剩したるの嫌あるを免れず。即ちこの中間が、公の占領したる乾坤たりしなり。而して、これ生前に多少の反對者ありしに拘らず、死後において、殆どすべての人より哀悼軫

伊藤公筆蹟

惜せらるゝ所以ならずんばならず。

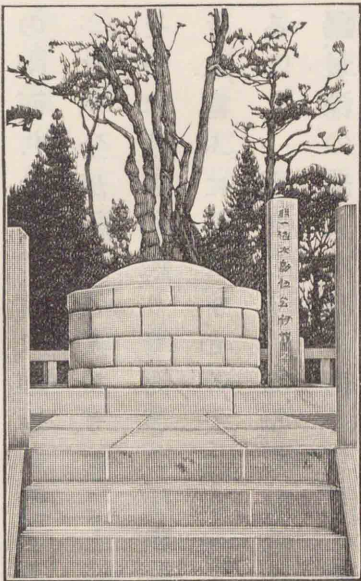
これと同時に、吾人が最も敬服するの一は、その眼界の大局に互りたるにありき。概言すれば、世人が長といひ薩といひ、藩閥といひ非藩閥といふ場合には、その心恆に國家の上に繋り、世人が漸く國家の大局に着眼する場合には、その眼孔は更に國際政局の上にあるべき。これ、公が單に日本に於ける第一流の政治家たるのみならず、また世界的政治家たるを得たる所以ならずんばならず。

更に、吾人をして欽仰せしむる一は、その所謂國家道樂これなり。公や、朝に立つも君國のためにし、野に在るも君國のためにす。その官職・地位の如きは、必ずしも公の拘泥する所にあらず。その心は、たゞ如何にしてその先輩等とともに創始したる維新の大業をして、その圓滿なる完結を告げしむべきかに存したりき。極言すれば、公は國家あるを知りて身あるを知らざりしなり。これ維新

志士においては孰れも皆是なりと雖も、その半世紀以後、富貴榮華を享受したる時代にまで、その精神を持續して毫も渝る所なかりしに至りては、誰かまた公の上に出づるものあらんや。吾人は、公の半面において、實に維新志士の典型を見たりしなり。

たゞ公が福運の人たりしことは、事實これを證してあまりあり。その卑賤より起りて、何等の蹉跌なく、人臣の極位に達したるが如きは言ふに及ばず、その失敗さへも、時としては幸福を齎し來りたること一再ならず。即ちその最後の如きは、最上の不幸、最大の慘禍、最深の悲哀なるに拘らず、若し傍觀者としてこれを見んか、孰れか、敢て此の如き幸福なる死所を得たるものぞ。人生皆死あり、ただ死所を得るを難しとなす。公の先輩木戸公は如何。彼は四十年代の働きざかりにして、西南戰爭中京都に客死したり。公、病中嚙語して曰く、西郷もう大抵にして止めんかと。公の苦衷豈憐むべ

伊藤公の墓



きにあらずや。大久保公は如何。西南の亂漸く平ぎ、今後十年を期して内政を整頓せんとするの最初に、兇刃のために斃れたり。固より伊藤公の如き後繼者ありしを以て、思ひ残す所少なかりしならんと推するを得べきも、その志業の中途にして逝きたるは、長く英雄をして涙襟に満たしむるものなくんばあらず。我が伊藤公や然らず。その國家に貢獻する所において、今や殆ど一代の總勘定を了りたりき。韓國統監は公の最後の任務なりしも、それすら既に段落を告げたり。固より一日の生存は一日の奉公たり、一日の奉公は一日の國益たれば、何人も公の長壽を祈る外なしと雖も、而も若し世にその死所を得たる人ありと

清
今の中華民國

せば、公の如きはその第一たるを争ふべからず。世界圓視の眞中において、日露清交叉の地點において、平和と好意の使命を齎したる途上において、而して生涯の筋書は殆どすべて演じつくしたる後において、突然その幕の落つるに際す。若し公の生や赫々たらば、その死や更に赫々たりと謂はざるを得ず。吾人は、公の最後にすらも福神の附纏うたるを見て、公の福運の轉た隆なるを驚歎せずんばあらざるなり。

以上は、唯今日において吾人が最後の敬意を表するため、清白なる良心を以て、この際に言ひ得べしと信じたる要點なり。これ以上の言は、いかに敬意を表すればとて、或は諛辭に近からん。而してこれ以外の言は、歴史家として寧ろ吾人の情熱の平調に復したる後を俟つて、徐ろに參究するも未だ晚しとせざるべし。

(蘇峰文選)

七わが夢

正風

高崎氏

男爵

御歌所長

(明治四十五年
歿)

夜もすがらひびくきぬたをわが夢の
たえまにうつと思ひけるかな

正風

正風筆蹟

憶北
一心
ひびくきぬたをわが夢の
たえまにうつと思ひけるかな

敦子

税所氏

歌人

掌侍

(明治三十三年
歿)

木かげとも知らで過ぎゆく小車の

ながえの上^へに散るもみぢかな

ねしづまる里のともし火みな消えて

敦子

子規

子規

正岡氏

直文

落合氏

號菽の家

國文學者

(明治三十六年
歿)

天の川しろし竹叢のうへに

さわくとわが釣りあげし小鱸の

しろきあぎとに秋の風吹く

直文

直文筆蹟

天の川しろし竹叢のうへに
さわくとわが釣りあげし小鱸の
しろきあぎとに秋の風吹く

左千夫

伊藤氏

歌人

(大正二年歿)

高山も低山もなき地の果は

見る眼の前に天し垂れたり

たらちねの母がつりたる青蚊帳を

すがしといねつたるみたれども

左千夫

節

朝日さしきぬ樂しかれ今日

赤彦

島木赤彦

本名久保田俊彦

アヲ、ギ同人

(大正十五年歿)

朝日さしきぬ樂しかれ今日

赤彦

あつて夜ふけ

こゝにして
はるけくもあるか

赤彦筆蹟

あつて夜ふけ

夕ぐれてなほ光ある

なほ光ある

遠山のゆき

茂吉

齋藤氏

醫學博士

アヲ、ギ同人

空穂

窪田氏

名は通治

現代の歌人

茂吉

ひさかたの時雨ふりくる空さびし

土におりたち鴉はなくも

空穂

いかなればたゞ一人我のさみしきや

夕食うれしみ食ぶる家びと

夕暮の
あつて夜ふけ
あつて夜ふけ
あつて夜ふけ

夕暮

屋根の上に百日紅の花あかく

こぼれて空はしづかなりけり

夕暮

前田氏

名は洋造

現代の歌人

空穂筆蹟

八 文藝と人生

菊池寛

或作品を読んで、うまいとは思ひながらも心を打たれない。他の作品を読んで、まづいとは思ひながらも心を打たれる。或作品

を読んで、よく描けてゐると思ひながら心を打たれない。他の作品を読んで、ちつとも描けてゐないと思ひながら心を打たれる。この二つの場合を、たれでも経験してゐると思ふ。文壇有数の名家の作品を読んで、うまいと感心する。が、こゝろは動かない。投書家程度の人の書いたまづい短篇を読んで、つい心を打たれることがある。

こんな場合を、どんなに説明してよいか。藝術的作品としては、前者が勝つてゐること萬々であると思ひながら、さて心を動かされるのは後者であるとしたならば、後者の持つてゐるものは何であらうか。或人は、後者には貴い實感が描いてあるといふであらう。他の人は、後者には得難い経験が描いてあるからといふであらう。とにかく後者には、前者の持つてゐない、何かがあることだけは、誰でも首肯するだらうと思ふ。私は、この後者の持つて居る

價値が何であるかに就いて、考へたいのである。

或人達は、作品には藝術的價値以外のものは存在しないといふかも知れない。私にはさうは思へない。或作品の中には、藝術などといふものとは別に、或價値が存在し得るものだと思ふのである。私は或作品の中に、藝術的表現などとは全く別に、或價値が存在するものだとおもふのである。即ち文藝作品の題材の中には、作家がその藝術的表現の魔杖を觸れないうちから、燦々として輝く人生の寶石が、澤山あると思ふ。

私は、かうした意味から、文藝の作品には藝術的價値以外の價値が、儼然として存在する事を信ずるのである。その價値の性質は何であるか。我々を感動させる力、それにはいろ／＼あるだらうが、私はそれを、假に内容的價値といつて置きたいと思ふ。又、バーナード・ショアの作品などは、藝術品として彼是言はれながらも、我

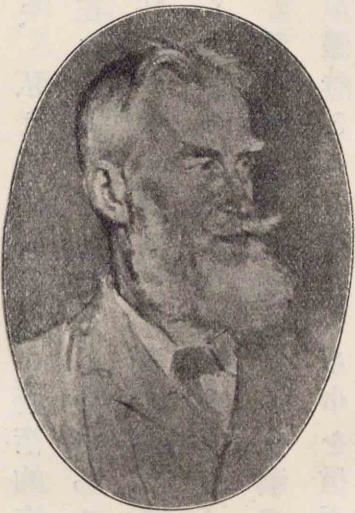
バーナード、
ショア、
英國現代の戯

曲家批評家
（西紀一八五六）

バーナード、
シヨール

私の心を打つ點に於て、他の藝術的戯曲を超越すること萬々である。かういふ内容的價値の例はいくらでも擧げられる。であるから、たとへ表現といふことを、どんなに深く、どんなに神祕に解釋

しても、表現とは全く別に、他の價値が存在し得ることを否定することは出来ないと思ふ。



これまでは、誰もあまり文句なくついて来てくれるだらうと思

ふ。私は一歩進めて言ひたい。この内容的價値が、文藝の作品においては、可なり重要である。かういふと、藝術至上主義者、乃至その傾向のある人の反感を買ふことは判つて居るが、私はさう主張せずには居られないのである。

藝術は藝術的價値さへあれば立派な藝術だ。よく描けてゐさへすれば立派な藝術だ。

私は、それに少しも反對しようとは思はない。藝術の能事は、表現に盡きる。「交番の前に巡查が立番して居る。其處へ通行人が来て道を訊く。」さうしたことでも、それが立派に完全に描けてゐれば、私はそれを藝術として立派だといひたいのである。私は藝術を説明して、魂がどうしたの、心がどうしたの、などといふ神祕説は嫌ひである。藝術の本能は表現である。無論、表現には魂や心がどうかするには違ひないが。

さて、私は前述の意味で、作者が描かんとしてゐることを立派に表現して居る場合は、それを立派な藝術品とするに躊躇しないのである。さて、立派な藝術品なら、それでいゝではないかといふと、私はそれでよくないといふのである。私は藝術品も、藝術的價値

以外に、所謂内容的價值を持つてゐなければならぬといふのである。その理由を言つて見よう。

文藝作品に接するとき、我々が求めて居るものは何かといふに、決して藝術的評價だけではない。我々の下す評價は、決して藝術的評價だけではない。我々は藝術的評價を下すと共に、道德的評價を下し、思想的評價を下して居るのである。

「これは藝術の作品である。たゞ藝術的評價を下せ」といつたところで、其處に人生の一角が描かれてゐる以上、それに對して道德的評價を下さずにはゐられないのである。其處に無反省な蕩兒の生活が描かれてゐる以上、それを非難せずにはゐられないのである。それがどんなに鮮に描かれて居ても、その生活に價値を見出すことは出来ないのである。何等かの思想が描かれてゐる以上、それに對して思想的批判を下さずにはゐられないのである。

戯曲の主人公などが、つまらない思想を懷抱してゐる以上、その性格描寫がどんなにうまくいつても、その舞臺技巧がどんなに巧でも、輕蔑せずにはゐられないのである。

文藝の作品に對して道德的評價——一寸ことわつておくが、道德的といつても、コンヴェンションナル因襲的な意味で言つて居るのではない。——いや、思想的評價を下してはならないといふのは、藝術家の逃口上である。文藝が人間の大きないとなみの一である以上、道德的評價や思想的評價を避ける譯には行かないのである。

藝術的價値を作るだけで満足してゐる人、その人を藝術家として尊敬する。が、そんな人は、自ら好んで象牙の塔に立てこもる人である。藝術的價値、藝術的感銘、それも人生に必要なないと謂はない。それも人生をよりよくする、わるくするとは謂はない。が、それだけを作るのではあまり頼りない、あまりに心細い。

私は、藝術家を二分したいと思ふ。たゞ藝術的表現を念とする作家と、それだけでは満足し得ない作家との二種類である。無論、その間には多くの階段はあるが。

當代の讀者階級が作品に求めてゐるものは、實に生活的價值である。が、それを邪道とし、藝術至上主義を振りかざして、安閑として居てもいゝのか知ら。凡ての他の物に幻覺を持つてゐない大人通士にして、猶藝術に對して、初心な神祕説を唱へてゐるものが頗る多い。藝術それだけで、人生に對してそれほど大切なものか知ら。藝術感銘それだけで、人は大いに満足し得られるか知ら。

私は、藝術はもつと實人生と密接に交渉すべきだと思ふ。繪畫、彫刻などは純藝術であるから、交渉の仕方が限られてゐる。——それだけ、人生に對する價值が少ないとおもふ。——幸にして文藝は、題材として人生を直接に取扱ひ得るから、どんなにでも人生と交

渉し得ると思ふ。それが畫家などに比して、文藝の士の有する特權である。

ロシヤの饑饉において、人は生きんがために宗教を忘れてしまつたといふ。況や藝術をや。生活に奉仕することにおいて、その職責を果すのである。無論、藝術的感銘を與へることによつて、生活をよくしないとは謂はない。が、それは稀薄であつて、句の如きものに過ぎない。

私は藝術が藝術である所以は、そこに藝術的表現があるかないかに依つて定まると思ふ。が、その定まつた藝術が、人生に對して重大な價值があるかどうかは、一にその作品の内容的價值、生活的價值に依つて定まると思ふ。

イブセン



イブセン

ノルウェーの
文豪

(西紀一八二
八一—九〇六)

トルストイ

ロシアの文豪

(西紀一八二
八一—九一〇)

トルストイ



私の理想の作品といへば、内容的価値と藝術的価値とを兼備した作品である。語を換へて言へば、我々の藝術的評價に及第すると共に、我々の内容的評價に及第する作品である。

イブセンの近代劇、トルストイの作品が、一代の人心を動かした理由の一は、あの中に在る思想の力である。その藝術だけの力でない。藝術のみにかくれて、人生に呼びかけない作家は、象牙の塔にかくれて、銀の笛を吹いて居るやうなものだ。それは十九世紀

頃の藝術家の風俗だが、まだそんな風なポーズを喜んで居る人が多い。

文藝は經國の大業——私はそんな風に考へたい。生活第一、藝術第二。

九 四季

一 月の夜半

松平 定信

「月の夜半こそ、おもふくまもなく心のそこも澄みわたりぬるものなれ。されど、闇の夜の空晴れて星の光さやかなるに、風たかく吹きかふは、また優りぬるやうに覺ゆ」といへば、雨ぞいとまさりぬるを」といふ。「いかにと問へば、いでや、早天の雨は更なり、草木の花咲き實のるも、皆この恵にこそあんなれ。またその感情のふかさ

夏の雨
(池上秀敏筆)



をいはば、今日は元日なりけりといふに、雨そぼふりて霞みわたりたるは、げに春やとぞ思ふめる。師走のみそかのどやかに降りたるも、春待顔にていとをかし。

すべて春は雨こそそのどかなれ。軒端より霞み渡りて、いとこまやかに降れるが、衣湿せども降るとは見えず。軒の玉水も間遠に音して、棲みすてし蜘蛛のいに玉ぬくけしき、庭のおもの枯生の底に緑や、添ひゆくも、柳の絲の動きもやらで露そふも、ともにいとどかなり。燈火挑^かげても何となく光しめりたるに、鐘の音のほかに響き來るも、心澄みわたりぬる

ものぞかし。その外、梅が香のしめり夜深くにほひわたるも、花にうしとかこちぬるもあはれはありけり。春も老いゆく頃、蛙の時得顔にすだくもをかし。

杜鵑の初音いかにと思ふころ、村雨のはらくと降出でたる。五月雨の幾日も降りくらして、ふみの卷々繰返しつゝ、ゐたれば、何となく世の中の事にも遠ざかりぬる心地ぞする。また、暑さに堪へかぬる頃、雲のみなざり出づる勢ありて、風ひとしきり吹落ちたるに、柳、芙蓉、なんどの葉裏白く見せたるも涼し。やがて大きやかなる雨の間遠に落ちたるが、後にはしきりに降來て、物音もきこえず、土のほひきたるもいと心地よし。軒端は玉の簾懸けたらんやうに、玉水のたえまなく落ちたるに、庭はひとつみづうみとなりて、あるは瀧おとし、または水走らせたるに、人々しばし物言はで、うちまもりゐたるもをかし。や、雲薄くなれば、池の面には數ふる

ばかり雨見えて、小鳥など庭へをどり出でて餌拾ふさまなり。はじめ雲の立出でし方は、はや空のひとしほみどりに見えて、虹など見ゆるに、木々のみどりの庭漑にたづみにかげ見ゆるも、いとすゞし。

老いたる女など、なるかみの音に驚きて這出でたるが、今日のは若かりしときのごと、よく霽れにけり。今時のはかく霽るゝこと稀なり、なんど、はや繰言いふもあり。『彼はかくあわてき』などいひて、かたみに笑ひとよみつゝ、『今日は蚊もすくなかるべし。なるかみの音もいとかすかなり。この頃の暑さも忘れぬ』とて、端近う出づれば、夕月の光さしわたりて、草木の露も玉なすに、肥えふくれたる蛙の、物待顔に空うちならみて、ふつゝ、かなる音に鳴くもをかし。秋くる頃の雨は、昨日にかはりて何となう淋し。萩の上風、外山の鹿の音など、月よりも身に沁む心地ぞする。常に聞きなれし、笈の水の音までも、あはれ深くこそ。月の前の村雨もまたをかし。

木版花月草紙
の一部

まいて、やゝ夜寒の頃、鳴きからしたる蟲の音の、雨のをやみにかすかなる聲して、枕近く鳴寄るもあはれなり。この雨に木々も染めなんと思へば、茸なども生ひいでなん。栗もはや落つべし、などとわらはべの物淋しげに、燈火にむかひつゝ、言ひいづるも、げにさま

まいて、やゝ夜寒の頃、鳴きからしたる蟲の音の、雨のをやみにかすかなる聲して、枕近く鳴寄るもあはれなり。この雨に木々も染めなんと思へば、茸なども生ひいでなん。栗もはや落つべし、などとわらはべの物淋しげに、燈火にむかひつゝ、言ひいづるも、げにさま

さまなり。
夜深き鐘
の音のう
ちしめる
ものから
さすがに

秋は聲冴えてきこゆるにぞ、鐘撞く人の心をもあはれと思ふばかり、感情はいと深かりけり。紅葉の染めそふも、白菊の移りゆきてひとさかり見するも、尾花の露重げにうちしをれたるに、龍膽りんとくのう

らみ深く咲きたるあたりもつきくし。朝顔の皆枯れたる中に、さゝやかに赤う咲出でたるが晝過ぐるまで凋みおくれたる、またあはれなり。野分の風はおどろくしきものから、雨は夕立に劣らざれど、さすがにあはれを添ふるは秋のならひなるべし。時雨のさと音して、夕日に白く降來るも、また音かへて枕とふもをかし。月よりも闇の夜よりも、あはれふかきものには侍らずやといへば、かうやうにいひならべては、げにもといふべからんが、一年も降る心地してよみ見れば、この雨はをとつ日より降出でしをと思ふところは變らじと、こゝろの中に思ひて聞きおしも、またをかしかりけり。(花月草紙)

二 うつりかはり

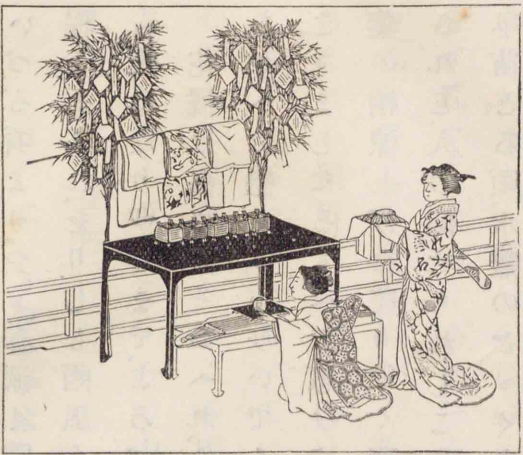
ト部 兼好

をりふしのうつりかはるこそ物ごとにあはれなれ。一ものあはれは秋こそまされと、人毎にいふめれど、それもさるものにて、い

まひとときは心の浮き立つものは、春の景色にこそあめれ。鳥の聲などもことのほかに春めきて、のどやかなる日影に、垣根の草もえいづる頃より、やゝ春深く霞みわたりて、花もやうくけしきだつ程こそあれ、をりしも雨風うち續きて、心あわたしく散り過ぎぬ。青葉になりゆくまで、よろづにたゞ心をのみぞ惱ます。

花橘は名にこそおへれ、なほ梅のほひにぞ、いにしへの事も立ちかへり戀しう思ひいでらる。山吹の清げに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひすて難きこと多し。灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢涼しげに、茂りゆく程こそ、世のあはれも人のこひしさもまされと、人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月菖蒲葺く頃、早苗とる頃、水雞のたゞくなど、心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。

棚機祭



棚機祭るこそなまめかしけれ。やうく夜寒になるほど、雁鳴きてくる頃、萩の下葉色づくほど、わさ田刈りほすなど、とり集めたることは秋のみぞ多かる。また野分のあしたこそをかしけれ。いひ續くれば、みな源氏物語枕の草子など、にとふりにたれど、おなじことまた今更にいとはじともあらず。おぼしきこといはぬは腹ふくる、業なれば、筆に任せつ、あぢきなきすさびにて、かいたり棄つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。

さて冬枯のけしきこそ、秋にはをさく劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りとままりて、霜いと白うおけるあした、遣水より煙の

立つこそをかしけれ。年のくれはてて、人ごとに急ぎあへる頃ぞ、またなくあはれなる。すさまじきものにして、見る人もなき月の寒けくすめる二十日あまりの空こそ心細きものなれ。御佛名荷前の使立つなどぞ、あはれに、やんごとなき。公事どもしげく、春のいそぎにとりかさねて催し行はる、さまざまいみじきや。追儺より四方拜に續くこそ面白けれ。晦の夜いたう暗きに、松どもともして、夜半過ぐるまで人の門たき走りありきて、何事にかあらんことごとしくの、しりて、足を空にまどふが、暁がたよりさすがに音なくなりぬるこそ年のなごりも心細けれ。なき人のくる夜とて魂祭る業は、この頃都にはなきを、あづまの方にはなほすることにてありしこそあはれなれ。

かくて明けゆく空のけしき、昨日に變りたりとは見えねど、ひきかへ珍しき心ちぞする。大路のさま、松立てわたして、花やかに嬉

清少納言
平安朝時代の
女流文學者
清原元輔の女

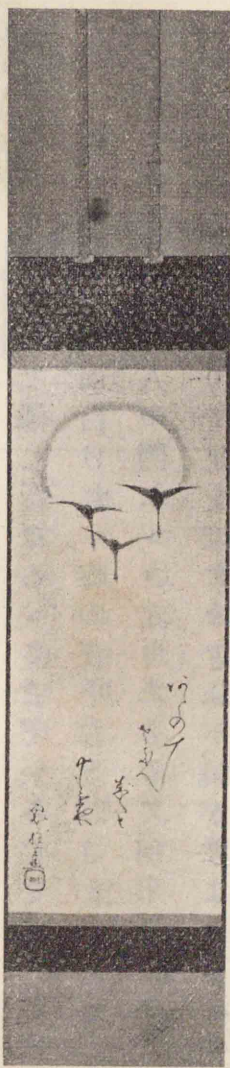
(酒井抱一筆)

しげなるこそまたあはれなれ。(徒然草)

三 春はあけぼの

清少納言

春はあけぼの。やうく白くなりゆく山ぎはすこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。夏はよる。月の頃はさなり、闇もなほ螢とびちがひたる。雨などの降るさへをかし。秋



は夕ぐれ。夕日はなやかにさして、山のはいと近くなりたるに、鳥のねぐらへゆくとして、三つ、四つ、二つなど飛び行くさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとちひさく見ゆるいとをかし。日入りはてて、風の音、蟲のねなどいとあはれなり。冬はつとめて。

雪のふりたるはいふべきにもあらず、霜などのいと白く、またさうでもいと寒きに、火などいそぎおこして、炭もてわたるもいとつきくし。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、炭櫃、火桶の火も白き灰がちになりぬるはわろし。(枕草子)

一 ● 造化の隠喩

坪内逍遙

人生と四季と相似たるは、詩人の想像を俟たずしてしるけし。紅顔の花に似たるを見、白髪の雪に似たるを觀んもの、誰か春冬を聯想せざらん。うら若きを「人生の朝」と名づけ、老いくちたるを「人生の夕」と呼べるにひとしく、翁をさして「幾十冬の霜をいたぐ」といひ、少女の麗しきを稱して「二八の春の花などいはんは、自然に思ひよるべき喩なり。」

それ驕炎の赫々たるは血氣激昂の相、これを青年の情熱に比す

秋の状云々
初めは浙瀝云
ともに歐陽修
の秋聲賦中の
語

べく、又壯時の意氣昂盛なるに比すべし。夏は陽威の徹する所、萬物悉く暢ぶ。丁壯は人生の夏なり。豪氣斗牛を呑む。大なる乾坤、蝸廬よりも狭し。而して彼等妄想の邊なきに耽りて、現實界の有限なるを知らず。この故に、挺然勇往し、悍然敢て爲す。又この故に相激し相薄り、天を撼かし地を震ふ。かの六七月の驟雨、何ぞそれ急激なる。猛然屋を發き、俄然樹を飛ばし、海を捲き山を崩す。豈これ壯年容氣の徒が破壊を事とするの隠喩にあらずや。もしくは盛夏陶々、毒炎燬くが如く、風死し石煮え、牛あふのき犬あへぐ。終日昏々居るに懶く、往くに懶く、生きたれども死せるが如く、在れども無きが如し。この陽威に撲たれて、惘々然たるの境、吾人またこれを迷惑耽溺の青年に見る。

秋に至りては然らず。「秋の状たる、その色慘淡として煙霏び雲歛まる。その容清明にして、天高く日晶かなり。その氣慄冽とし

て人の肌骨に砭す。その意蕭條として山川寂寥たり。即ち沉寥は秋の意なり。又、初めは浙瀝として蕭颯たり。忽に奔騰して碎湃たり。波濤の夜驚き、風雨の驟に至るが如し。その物に觸るるや、鏗々錚々として金鐵皆鳴る。秋意の慄冽なるをみるべし。

秋はまた萬物豐足の期。見よ、白帝の來るや、悉く金衣を被りてきたるを。沉寥と慄冽とは、いまだ秋意をつくしたるものにあらず。蓋し、このもの足りて綽々たる容こそ、別に幾分の秋意の宿るなるべく、秋は凄慘をのみその意となせるにあらじ。

それ春は、外あまりに派手やかにして内浮きたり。秋は、外靜にして内しまれり。春は盎然として長閑なれども、内に堅實なる所なし。秋は凄然として痛ましけれども、内、和平にして融然たり。春の眺はめざましけれど、そのさかり何ぞさしも短うしてはかなきや。梅櫻相追うて散りつくし、桃李相ついで代謝す。沙羅雙樹

の花の色、祇園精舎の鐘の聲、無常は雙方に見えたれども、秋に悲観するものは多く、春に靜かなる心は稀なり。陽陰に克てばなるべし。

春の時にありては、山笑ひ鳥戯れ、天地謹然として、隨所に樂土あり。天地相和ぎ、男女相よるこぶ。思欲滔々として、是非空しからんとす。これ陽氣、覆載を驅るの時なり。これを青年が感情的生活に比す、近からずや。

要するに、春は感動の期、その相は美情の天地なり。夏は活動の期、その相は壯意氣の天地なり。而して秋は冥想の期、その相は肅理性の天地なり。青春は譬へば抒情詩人の生活、朱夏はかの世間の英雄、白藏は哲學者の生活に喩ふべし。知らず、立冬は如何なる生活にか比すべき。

人間頽然として老いきたれば、枯槁骨立して一見慘然たり。而

して、戚々然として以て死に至る。頽る晩冬の落然たるに似たり。又見よ、寒景の闐然として以て索然たるを。何ぞ、人の羸憊して血氣日に衰へたるに似たる。然れども、かくの如きは晩冬及び老境の容貌のみ。かるがゆるに冬を悲觀し、かるがゆるに老境に絶望するは、いまだ大法を悟らざるものか。

それ陰陽消長の無始にして無終なるは、猶生活の首尾なきが如し。冬きたりて陰氣極するや、一陽來復して、年の内に踏込む春の日脚長閑に、軒端の梅ふゝみそめて、一輪づつの暖かさに、また青帝の駕の近きを知る。老は一面より見れば、壞空の時、他の面より見れば、新生々の起端、即ち人間一生の大事、圓滿成就して再び大元に歸するの時、これ豈無上光榮の期にあらずや。彼の君子人の老後を見るに、煩惱自ら銷盡して、身神塵垢の表に淨く、外樂を非とし、世暄を忘れ、澹然として慮なく、泊乎として爲すなく、内に自持する所

ありて、行住晏如たり。これ決して情感の春、氣鋭の夏、思索の秋において見るべからざる所、老いて益、神すこやかに、智徳よく和合したる、人生何れの時か、この時よりいみじかるべき。

紅葉は二月の花よりも紅にして、秋野は春園の浮靡にまさる。北風ひとたび渡りて萬象蕩然、大雪頻りに降りて山河銀と化する處、千里一色、天地一味、古今覆載、何物かこれよりも崇嚴、これよりも濶大なる。全壞空は崇の極なり。冬は大涅槃の面影なり。

それ陰陽の往來に終始なし。生死の終始はた形の生滅によりて決すべけんや。春を端とし冬を終とし、幼を首とし老を尾とする、或は膚淺の見解ならん。まだいとけなき嬰兒とみづはぐむ老人とは、身も心もよぼくとして、物いふも思ふもさだかならず。圓やかにしてうつくしきと、皺びてやせがれたるとの差こそはあれ、心の上よりいへば、そのさかひ分き難し。輝然として齒の墮ち

年のうちに
古今集の歌

たる、まだ假の齒だに生ひいでざる、頭髮の薄れ行きて禿げたる、うぶ毛のまだ薄うして色赤き、老人が紅顔の童然たる、幼子の足もとのあぶなげなる、兒のわがまなる、翁媪のかた意地なる、兒の無邪無心なる、翁媪の惘然たる、いづれか首、いづれか尾、年のうちに春はきにけり一年を去年とやいはん今年とやいはん。

人の生まるゝ刹那や、たとへ生氣ありといふとも、殆ど無意識なり。その息絶ゆる一瞬、かれはた殆ど意識なし。共にこれ陽氣潛み藏るゝの時、唵々然たり、暗々然たり。いづれをか春の首とし、いづれをか冬の終極とせん。

あはれ、人生は四季に似たるかな。四季偏く一巡して陰陽和諧し、生住壞空して人竟に正覺す。春に春の能事あり。夏には夏の能事あり。秋冬また各、その本領を具ふ。陰陽は往來して須臾だにとまらず、人ひとり退轉す。これ人生の秋冬が、屢、索然たる所

以にあらざや。

四時ことごとく樂時、老少ともに樂境、予はこれを造化の隱喻とす。(人生四季に據る)

一一 小松内府

太政入道は、かやうに人々數多縛めおいても、なほ心ゆかずや思はれけん、既に赤地の錦の直垂に、黒絲緘の腹卷の白金物打つたる胸板せめ、先年安藝の守たりし時、神拜のついでに、靈夢を蒙つて嚴島大明神より現に賜はられたりける銀の蛭卷したる小長刀、常の枕を放たず立てられたりしを脇に挟み、中門の廊にぞ出でられたる。大方その氣色ゆゝしうぞ見えし。「貞能」と召す。筑後守貞能は、木蘭地の直垂に緋緘の鎧着て、御前に畏つてぞ候ひける。

平右馬助
平忠正

小松内府
平重盛
太政入道
平清盛

新院

崇徳上皇

一宮

重仁親王

故刑部卿

平忠盛

故院

鳥羽法皇

院

後白河上皇

内

二條天皇

馬助をはじめとして、一門半ば過ぎて新院の身方に参りにき。一宮の御事は、故刑部卿殿の養君にてましく、しかば、旁見放ち参らせ難かりしかども、故院の御遺誠に任せて、身方にて先をかけた行き。これ一つの奉公。次に平治元年十二月、信賴・義朝が謀叛の時、院内を取奉つて大内にたて籠り、天下くらやみとなりたりしにも、入道隨分身を捨て、兇徒を追落し、經宗、惟方を召しおこしめしに、至るまで、君の御爲に既に命を失はんとする事度々に及ぶ。されば人何と申すとも、いかでかこの一門をば、七代までは思召し捨てさせたまふべき。それに成親といふ無用のいたづら者、西光と申す下賤の不當人が申す事に、君のつかせ給ひて、動もすればこの一門滅さるべき由の御結構こそ然るべからね。この後も讒奏する者あらば、當家追討の院宣を下されつと覺ゆるぞ。朝敵となつて後は、いかに悔ゆとも益あるまじ。暫く世を鎮めんほど、法皇をば

鳥羽の北殿へ移し参らするか、さらずばこれへまれ御幸をなし参らせんと思ふはいかに。その儀ならば、定めて北面の者どもが中より、矢をも一つ射んずらん。その用意せよと、侍どもに觸るべし。大方は入道院方の奉公思ひ切つたり。馬に鞍おかせよ、きせなが取出だせ」とこそ宣ひけれ。

主馬判官盛國急ぎ小松殿へ馳参つて、世ははやかう候と申しければ、大臣聞きもあへ給はず、嗚呼、はや成親卿の首の刎ねられたんなと宣へば、その儀にては候はねども、入道殿の御きせながを召され候上は、侍どもも皆打立つて、只今院の御所法住寺殿へ寄せんとこそ出立ち候ひつれ。暫く世を鎮めん程、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し参らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし参らせうとは候へども、内々は鎮西の方へ流し参らせんとこそ議せられ候ひつれ」と申しければ、大臣、何によりて只今さる御事のおはすべきとは思



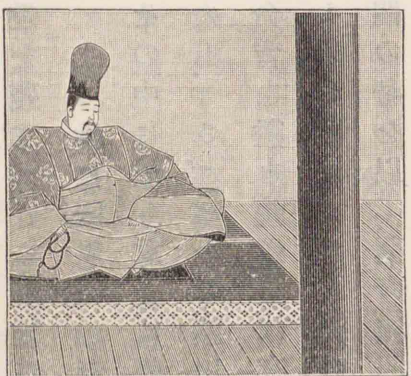
はれけれども、今朝の禪門の氣色、さる物狂ほしき事もやおはすらんとて、急ぎ車を飛ばせて西八條殿へぞおはしたる。門前にて車より下り、門の中へさし入りて見給ふに、入道腹巻を着給ふ上、一門の卿相雲客數十人、各色々の直垂に思ひくの鎧着て、中門の廊に二行に着せられたり。その外、諸國の受領、衛府、諸司などは縁に居こぼれ、庭にもひしと並み居たり。旗竿どもひきそばめひきそばめ、馬の腹帶をかため、冑の緒をしめ、只今皆打立たんずる氣色どもなるに、小松殿、烏帽子直衣に大紋の指貫のそば

平清盛
(前賢故實)



入道ふしめになつて、あはれ例の内府が世をへうする様に振舞ふものかな、大きにいさめばや」とは思はれけれども、流石子ながらも、内には五戒を保つて慈悲を先とし、外には五常を亂らず、禮儀を正しうし給ふ人なれば、あの姿に腹巻を着てむかはんこと、流石おもはゆうはづかしうや思はれけん、障子を少し引立てて、腹巻の上に素絹の衣をあわてぎに着給ひたりけるが、胸板の金物の少し外れて見えけるを隠さうと、頻りに衣の胸を引違へ引違へぞし給ひける。大臣は舍弟宗盛卿の座上につき給ふ。入道宣ひ出ださるゝ事もなく、大臣も亦申上げらるゝ旨もなし。

平重盛
(菊池契月筆)



や、あつて入道宣ひけるは、あの成親卿が謀叛は事の數にも候はず、一向法皇の御結構にて候ひけるぞや。暫く世を鎮めん程、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し参らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし参らせんと思ふはいかにと宣へば、大臣聞きもあへ給はず、はらくとぞ泣かれける。入道さて、いかにやいかにと呆れ給へば、や、あつて、大臣涙を抑へてこの仰承り候ふに、御運ははや末になりぬと覺え候。人の運命の傾かんとては、必ず悪事を思立ち候ふなり。又御有様を見参らせ候ふに、更に現とも覺え候はず。流石我が朝は邊地粟散の境とは申しながら、天照大神の御子孫國の主として、天兒屋根命の御末朝の政を掌らせ給ひしよりこのかた、太政大臣の官に至る人の、甲冑をよ

ろふこと、禮儀を背くにあらずや。就中御出家の御身なり。それに、法衣を脱捨て、忽に甲冑をよろひ、弓箭を帶しましさん事、内には破戒無慙の罪を招くのみならず、外には仁義禮智信の法にも背き候ひなんず。かたがた恐ある申事にて候へども、心の底に旨趣を残すべきにも候はず。

まづ世に四恩候。天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩、是なり。その中に最も重きは朝恩なり。普天の下王土に非ずといふことなし。されば、かの潁川に耳を洗ひ、首陽山に蕨を折りし賢人も、勅命背き難き禮儀をば存知すところ承れ。いかにいはんや、先祖にも未だ聞かざつし太政大臣を極めさせ給ふ。所謂重盛が無才、愚闇の身を以て、蓮府、槐門の位に至る。加之、國郡なかばは一門の所領となつて、田園盡く一家の進止たり。是希代の朝恩に非ずや。今此等の莫大の御恩を思召し忘れさせ給ひて、みだりがはしく法

潁川に云々
許由のこと
首陽山に云々
伯夷、叔齊の
こと

皇を傾け参らせ給はん事、天照大神、正八幡宮の神慮にも背かせ給ひ候ひなんず。それ日本は神國なり。神は非禮を受け給ふべからず。然れば君の思召し立たせ給ふ處、道理なかばなきにあらず。中にもこの一門は、代々の朝敵を平げて四海の逆浪を鎮めしことは、無雙の忠なれども、その賞に誇ることは、旁若無人とも申しつべし。聖徳太子十七箇條御憲法に、人皆心有り、心各執あり。彼を是し、我を非し、我を是し、彼を非す。是非の理、誰か能く定むべき。相共に賢愚なり。環の如くして端なし。爰を以て縦ひ人怒るといふとも、却つて我が咎を懼れよとこそ見えて候へ。然れども當家の運命未だ盡きざるによりて、事既に露れ候ひぬ。その上、仰せあはせらるゝ成親卿を召置かれぬる上は、たとひ君如何なる不思議を思召し立たせ給ふとも、何の恐か候ふべき。所當の罪科行はれぬる上は、退いて事の由を陳じ申させ給ひて、君の御爲には愈奉

公の忠勤をつくし、民の爲には益、撫育の哀憐を致させ給はば、神明の加護に預つて、佛陀の冥慮に背くべからず。神明・佛陀感應あらば、君も思召し直すこと、などか候はざるべき。君と臣とを比ぶるに、親疎わく方なし。道理と僻事とを並べんに、いかでか道理に附かざるべき。是は尤も君の御理にて候へば、叶はざらんまでも、院中を守護し参らせ候ふべし。その故は、重盛はじめ、敍爵より、今大臣の大將に至る迄、しかしながら君の御恩ならずといふことなし。この恩の重き事を思へば、千顆萬顆の玉にも超え、その恩の深き色を按ずるに、一入再入の紅にも猶過ぎたらん。然らば、院中へ参り籠り候ふべし。その儀にて候はば、重盛が身に代り命に代らんと契りたる侍ども、少々候ふらん。是等を召具して、院の御所法住寺殿を守護し参らせて候はば、流石以ての外の御大事でこそ候はんずらめ。悲しきかな、君の御爲に奉公の忠を致さんとすれば、迷慮

八萬の頂よりもなほ高き父の恩、忽に忘れんとす。痛ましきかな、不孝の罪を逃れんとすれば、君の御爲には已に不忠の逆臣ともなりぬべし。進退維谷まれり、是非いかにも辨へ難し。詮ずる所、たゞ重盛が首を召され候へ。富貴といひ、榮華といひ、朝恩と申し、重職といひ、旁極めさせ給ひぬれば、御運の盡きんこと難かるべきにあらず。富貴の家には、祿位重疊せり。再び實なる木は、その根必ず傷むと見えて候。心細うこそ候へ。いつまでか命生きて、亂れん世をも見候ふべき。唯末代に生を受けて、かゝる憂目にあひ候ふ重盛が果報の程こそ拙う候へ。唯今も侍一人に仰せつけられ、御壺の内へ引出だされて、重盛が頭の刎ねられんずる事は、いと易い程の御事でこそ候はんずらめ。これを各聞き給へとて、直衣の袖も絞るばかりにかきくどき、さめくと泣き給へば、その座に並み居給へる平家一門の人々、皆袖をぞ濡らされける。(平家物語)

一二 世界の四聖

高山樗牛

生まれて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる、聖人に非ずんば、誰かこれを能くせんや。釋迦、孔子、ソクラテス、基督の四人、世呼んで世界の四聖と稱す。宜なるかな。

釋迦は、西曆紀元前凡そ六百年の頃、印度伽毘羅國の王家に生まる。父は淨飯王、母は摩耶夫人、其の本名を悉達多といふ。釋迦は伽毘羅王家の族名にして、佛陀は其の出家成道せる後の尊號なり。その身一國の太子に生まれけれども、夙に思を人生の問題に潜め、二十九の歳、妻子を捨てて王城を逃れ、山林に隠れて道を修むること六年、終に人生の奧義を極め、無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘年の間、北天竺の各地に巡錫して教化を布き、年八十餘歳にして跋提河バダキの邊に歿しぬ。今の佛教は、即ち釋迦一代の教訓に基づく。

蓋し、釋迦の當時印度には幾多の哲學ありき。されど徒に思索の高遠を欽びて、人生の疑問に適切ならず、偏に幽玄なる談理と慘澹たる苦行とによりて、安心の道を求めたり。其の流派を樹てて、相争ふ所は、畢竟名目上の優劣のみ、いまだ一世の元々をして歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦この間に生まれ、其の廣大なる慈悲と無邊なる智慧とを以て、一世の木鐸となり、民をして其の歸依する所を知らしめたり。

孔子名は丘、孔子は其の尊稱なり。今を去る二千四百餘年の昔、支那の魯國に生まる。幼にして學を好み、禮を習ふ。壯年の頃魯國の官吏となり、傍ら子弟を教へて夙に令聞あり、學徳愈進む。魯の定公テイコウの時に至り、擢でられて大司寇の職に就く。治績大いにあるが、内外其の風采を想望す。時に齊侯セイコウ魯國の日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ、定公をして孔子を用ひざらしむ。孔子、時運の非

齊侯
景公
定侯
魯國の主

なるを見、五十六歳の老軀を挺し、門下の高足を率ゐて四方の遊説を試みぬ。當時の支那は所謂春秋の亂世なり。周の王室は名のみにして、君臣の大義は蕩然として地を掃へり。或は臣にして其の君を弑するものあり、子にして其の親を害するものあり。強は弱を食み、大は小を併せ、權力の外に道義あるなし。教化の陵夷、風俗の頹廢、未だ曾てこの時のごときはあらず。孔子既に志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出で、大義名分を天下に唱へて、狂瀾を既倒に回さんとす。その志や、高且大なりと謂ふべし。かくの如くにして、四方に漂浪すること十三年。時非にして道容れられず、

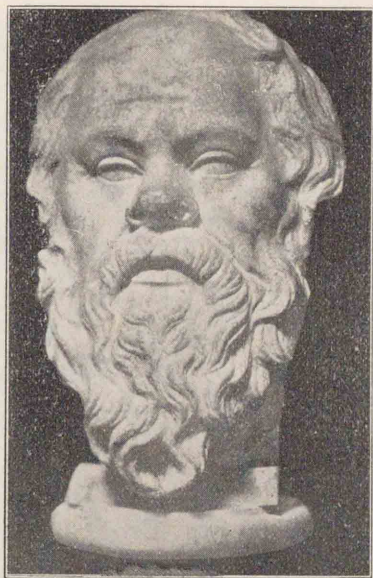


孔子
(狩野探幽筆)

世また耳を名教に傾くる者なし。こゝにおいて已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、嘆じて曰く、嗚呼、吾が道遂に窮せり。世遂に吾を知るものなきかと。門弟子貢慰めて曰く、何ぞ、夫子を知るものなからんやと。孔子答へて曰く、天を怨みず。人を尤めず。下學して上達す。吾を知る者はそれ天か。君子は歿して名の稱せられざるを病む。吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えんやと。後幾ばくもなくして歿しぬ。時に年七十三。ソクラテスは希臘のアテネ府に住める一彫刻師の子なり。其の生まれしは凡そ西曆紀元前四百七十年の頃にして、釋迦、孔子と年を隔つること數十年に過ぎず。東西の聖人、殆ど時を同じうして世に出でたるは、奇なりと謂ふべし。希臘の當時は、所謂詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の争に留まり、道徳は空文の上へのみ尙ばれたり。其の状なほ釋迦當時の印度のごとく、人生

社會の實際に關しては、殆ど裨益するところ無かりき。ソクラテスは、慨然として時弊の救済を以て自ら任じ、盛に道を講じ、理を談じ、諄々として倦まず。詭辯學派の輩に遇へば、則ち其の獨得の論法を以て辯難攻撃して一步も假借せず、侃諤の正義は、其の稀代の雄辯と相伴なひて一世を風靡せり。然るに、喬木は風に折らるゝの喩に漏れず、群小のソクラテスに快からざるもの

ソクラテス



相謀りて、國法に背ける者としてソクラテスを讒訴せり。其の訴狀に曰く、ソクラテスは國教を信ぜずして異教を創め、以て人心を惑亂せり。國法によりて死刑に處すべし」と。ソクラテスがこの讒訴に對する抗議は、實に壯快を極めたるものにして、慨世憂國の

アスクレピオス
醫藥の神

至誠を以て國民に訴ふるところ、語々百世の眞理ならざるはなし。然れども、判官はソクラテスを以て傲岸不遜なりとし、死刑を宣告せり。ソクラテス泰然として驚かず、曰く「命のみ」と。其の獄中にあるや、常に其の門弟子を集めて、生死・靈魂・未來の事を説き、人の脱獄を勸むるに對しては、輒ち答へて曰く「予は唯正義に導かれんのみ。死また何するものぞ。人生の幸福は靈魂の上にある」と知らずや」と。終に従容として毒を仰いで歿せり。その將に歿せんとするや、弟子遺言を求む。ソクラテス曰く「爾一雞を以てアスクレピオスの神に捧げよ」と。蓋し曾て病みし時、平癒を祈りて謝を致すことを忘れしなり。希臘の聖人ソクラテスは、かくの如くして逝きぬ。年七十。

基督は本名を耶蘇といふ。基督とは「膏灌がれたる者」といふ義にして、教徒の奉れる尊稱なり。猶太のベツレヘムに生まる。西

ヨハネ
ヘブライの有
名な豫言者

キ
リ
ス
ト



曆紀元第一年は、實に其の生後四年にあたるといふ。父はヨセフと呼べる賤しき木匠にして、母はマリヤといふ。長じて三十歳の頃、豫言者ヨハネの洗禮を受けて、始めて傳道の生涯に入り、爾來三年の間、猶太の各地を歴遊し、もろもろの迫害に屈せずして、其の福音を傳へたり。當時羅馬帝國は榮華已に其の極に達し、禍亂の萌芽其の中に胚胎し、災異荐りに至りて、天下寧日なし。殊に基督の故國なる猶太は、久しく暴君の收斂に疲れ、異邦人の侮慢を被れり。民衆は徒に珍奇の淫祠を崇拜して、益放縱の俗にながれ、學者は詭辯を弄びて、空しく人を惑はすのみ。こゝにおいて、一世の人心は慊焉として、一大偉人の現出して、この暗黒の社會を

照破せんことを渴望せり。基督はこの間に生まれ、自ら「救世の使命を負へる神の子なり」と稱し、昂然として其の偉大なる新教理を宣傳せしかば、遠近靡然としてこれに赴く。僧侶、學者、官吏等これを喜ばず、猥りに新法、異説を唱へて民を惑はすものなりとなし、基督を捕へて磔殺の刑に處す。基督豫め此の事あらんことを慮り、晏然として騒がず、靜に祈りて曰く、「神よ、彼等を赦せ。彼等は其の爲すべき所を知らざればなり」と。其の刑場に赴くや、路傍に哀哭する女子を顧みて曰く、「エルサレムの女子よ、我が爲に哭くことなかれ。唯己と己の子とのために哭け」と。かくの如くして、基督は三十三年を一期として、十字架上の露と消え去りぬ。基督死して後、其の弟子等は激烈なる迫害に抵抗して、其の教を天下に弘めぬ。基督教即ちこれなり。

以上は四聖の略傳なり。其の人物事蹟の高大にして雄偉なる、

永く後人の景慕し、崇拜すべき所なり。而して、四聖の中、釋迦を除きては、いづれも轆轤不遇の間に其の生を終へたり。孔子は志を四方に得ず、其の經綸を抱いて空しく詠歎の間に歿せり。ソクラテスと基督とは、いづれも讒者の手にかゝり、或は毒を仰ぎ、或は盜賊と並びて十字架上に磔殺せられたり。慘なりと謂ふべし。然れども、是等の人々の志しし所は天下後世にあり。現世の禍福と一身の安危とは、毫も其の顧慮する所にあらず。故に其の死に就くや、晏如として恰も歸するが如し。孔子は、其の一身の不幸を憂へずして、却りて「わが道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えんや」と嗟嘆せり。釋迦は、衆生のために其の妻子と王位とを抛ちて、食を路傍に乞へり。ソクラテスは、死罪の脅迫に遇うて揚言して曰く、正義を信ずるものに取りて、死はた何するものぞ。吾をして一日の生あらしめんか、其の一日即ち國民の迷を醒さざるべから

ずと。基督は、己を罪に陥るゝ者のために神に祈りたり。嗚呼、何ぞ其の慈悲の廣大にして無邊なるや。

涅槃
(伊川 榮)



四聖は、其の生まれたる處と時とを異にす。故に、其の教理にもまた多少の差異なきを得ず。今其の要を擧ぐれば、左の如し。
釋迦の教理は、煩惱を斷滅して、涅槃に達するを主旨とす。それ、人生は苦に始まりて苦に終る。生、老、病死、いづれか苦にあらざるべき。故に吾人は、現世を苦界と觀ぜざるべからず。而して、苦の原因は情慾にあり。情慾の原因は、我の一念に執着するにあり。故に吾人は、我の一念を脱却して、無我

修身

身を修め云々
古之欲明明
徳於天下者
先治其國。欲
治其國者先
齊其家。欲
齊其家者先
修其身。欲
先正其心。
欲正其心者
先誠其意。
(大學)
孝は百行の本
古文孝經の序

無念の境界に達せざるべからず。是、人生究竟の樂地にして、涅槃即ちこれなり。

孔子の教は、身を修め、家を齊へ、天下を治むるにあり。而して身を修むる基は孝にあり。故に孝は百行の本なり。君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、皆これに基づく。人は生まれながらにして、美徳を天に稟くれども、後天の氣質によりて、これを完うすること能はざる者多し。教育の要こゝにおいてかあり。既に教育を受けて身既に修まらば、家自ら齊ふべく、家齊はば、國自ら治まるべく、國治まらば、天下自ら太平なるを得べし。故に孔子の教は、一身の修養に始まり、治國平天下に終るものと見るを得べし。ソクラテスの教は、所謂知徳合一説なり。謂へらく、真正の知識は即ち道徳なり。故に行ふと知るとはもと一體のみ。知つて行はざると、行うて知らざるとは、共に知識道徳の眞正なるものにあ

釋

迦



(雪舟筆)

らず。眞理を確信し、其の實行を以て最上の義務となせば、正義自ら其の中にあり。正義は靈魂の満足なり。而して靈魂は肉體と異なりて、不朽不滅なるものなり。故に吾人の正義を行ふや、現世の利害は決して顧慮すべきにあらず。道德は富貴のために存せず。然れども、富貴は道德の中に在り」と。

基督の教は「愛の教なり」と稱せらる。所謂山上の垂訓は、三年傳道の極意を包括するを以て、左に其の大略を擧げん。曰く、心の貧しき者は福なるかな、天國は其の人の有なればなり。悲しむ者は福なるかな、其の人は慰めらるべければなり。飢ゑ渴く如く義を慕ふ者は福なるかな、其の人は飽くことを得べければなり。憐む者は福なるかな、其の人は憐みを得べければなり。心の清き者は福なるかな、其の人は神を見るべければなり。惡に敵するなかれ。人若し汝の右の頬を打たば、左の頬をも轉じてこれに向けよ。汝

の隣人を慈しみて、汝の敵を愛せよ。一人に見せんがために、義を其の前行ふなかれ。汝等施をするとき、右の手に爲す所を、左の手に知らしむるなかれ。隠れたるを鑑み給ふ神は、あらはに報い給ふべければなり。人は、神と財とに兼ね事ふること能はず。人を是非するなかれ。人の目にある塵を見ながら、何ぞ己が目にある梁木を見ざる。汝等求めよ、然らば與へられん。尋ねよ、然らば遇はん。叩け、然らば啓かれん。窄き門より入れ、沈淪に至る路は濶く、其の門は大きく、これより入る者は多し。嗟乎、いかに生命に至る路は窄く、其の門は小さく、其の路を得る者の少なきぞや。凡そこの訓を聽きて行ふ者は、磐の上に家建てたる智者の如く、聴けども行はざる者は、沙上に屋を架せる愚人の如しと。基督教の精髓は、後世の人如何なる色彩を加ふとも、實にこの山上の垂訓を基とせざるを得ず。

嗚呼、四聖逝いて既に幾千年ぞ。而してその教の、今なほ凛々として生氣あるを見よ。世界累代の幾億兆の民衆は、この教によりて道念を養ひ、其の安慰を求む。四聖の如きは、實に人類の永遠なる救濟者なりと謂ふべし。其の遺徳の高大なること、何を以てかよく是に比せん。(樗牛全集)

一三 夕占問 (その二)

谷崎潤一郎

姫は、長い春の日に遊び飽きると、細殿の局へやつて来て、乳人の話に耳を傾けるのが常であつた。貴い家に生まれて、世の中といふものを知らずに育つた、まだ幼い姫の身には、乳人の物語るいろいろの世間話、代々の御門の御事蹟や、先祖の大臣たちの性行や、今日此頃の攝政・關白の榮華のさまや、さては天竺・震旦の御佛や聖賢の話など、すべてが珍しく面白く感ぜられた。

姫
藤原兼家の女
超子
冷泉天皇の女
御

「私の夫は、もと東國の常陸介を勤めて居た事がございます。かういつて乳人は、また遠い東の國々の風俗を話して聞かせる折もあつた。」

「都に遠いそんな土地に、そなたの夫はよくも住まれたものぞ。」
「誰れしもしやでございませうが、公の役目ならば致し方がございませぬ。」なるほど東は、ひどい邊鄙な土地でございませう。が、また邊鄙なだけに、氣樂なこともあるやうでございませう。いつぞや敦敏の少將がおなくなりになつた時、東國の人はそれを知らずに、遙々と都へ馬を贈つて参つたことがございました。その折、少將の父上の、小野宮の大臣がおよみ遊ばしたお歌を、御存知でいらつしやいますか。」

「まだ知らぬ人もありけり東路に
われも行きてぞ住むべかりける
と、吟じてきかせたりする。」
その小野宮の大臣の弟で、姫の祖父にあたる故九條の右大臣の尊を、乳人は一番熱心に屢語つた。
「祖父様は、ほんたうにえらいお方でいらせられました。天徳四年の五月四日におなくなり遊ばしましたが、御存生でいらつしたら、今頃はきつと太政大臣におなりなされたでございませう。當帝といひ、東宮といひ、みな祖父様の孫でいらつしやいますよ。さういつてから、乳人はいつでも九條殿の御遺誠を讀んで聞かせらる。先起稱屬星名號七遍、次取鏡見面、次見曆知日吉凶、次取楊枝向西洗手、次誦佛名、及可念尋常所尊重神社、次記昨日事、次服粥、次梳頭、次除手足甲……と、漢文體の文章を細やかに説明して、姫にもこれ

敦敏
藤原實頼の長
子
小野宮大臣
藤原實頼
關白忠平の長
子

まだ知らぬ
(後撰集)

九條右大臣
藤原師輔
九條殿

當帝
冷泉天皇
東宮
守平親王

「まだ知らぬ人もありけり東路に
われも行きてぞ住むべかりける
と、吟じてきかせたりする。」
その小野宮の大臣の弟で、姫の祖父にあたる故九條の右大臣の尊を、乳人は一番熱心に屢語つた。
「祖父様は、ほんたうにえらいお方でいらせられました。天徳四年の五月四日におなくなり遊ばしましたが、御存生でいらつしたら、今頃はきつと太政大臣におなりなされたでございませう。當帝といひ、東宮といひ、みな祖父様の孫でいらつしやいますよ。さういつてから、乳人はいつでも九條殿の御遺誠を讀んで聞かせらる。先起稱屬星名號七遍、次取鏡見面、次見曆知日吉凶、次取楊枝向西洗手、次誦佛名、及可念尋常所尊重神社、次記昨日事、次服粥、次梳頭、次除手足甲……と、漢文體の文章を細やかに説明して、姫にもこれ

を日課としなければいけないといふ。

彼の女の教へる所によると、祖父の次にえらいのは姫の父親の中納言であつた。その證據には、父は九條殿の三男に生まれながら、伯父の參議の地位を超越して、既に三位中將の要職を占めて居る。このやうな立派な父君を持たれた姫は、今に必ず御門の后におなりなさるに相違ない。立身出世を遊ばす事は疑ないなどといはれると、その頃漸う十二三の姫の胸にも、花やかな楽しい未來が、夢のやうに描き出される。

全く乳人のいふとほり、父は伯父よりも數等勝れた人物のやうであつた。「東三條の中將は早い出世をされたものだ。この様子では、兄君より先に大臣になれるだらう」といふやうな評判さへも、ちらほらと世上に洩れ傳はる。その爲でもあらうか、父と伯父とは互に反目して居るらしく、堀河の伯父の邸と、東三條の父の邸と

中納言

藤原兼家

師輔の第三子

東三條殿

伯父

藤原兼通

兼家の兄

は、目と鼻の間にありながら、ついぞ往來をした事がない。例の乳人が口癖にする御遺誠の中にも、爲親必竭、孝敬之誠、恭兄如父、愛弟如子といふ文句があるのに、伯父と父とはなぜかうだらうと、姫は折々胸を痛めることもあつた。

元方

藤原氏

民部卿

(天曆七年憤死)

「お父様と伯父様との御仲が悪いのは、元方卿の悪靈の所業だと、誰れやらが呟いて居たけれど、そんな事があるものか知ら。」

かういつて、姫が不審がれば、乳人は顔を眞青にして、悪靈などと、めつさうなことを仰います。二度とそのやうなことを仰つてはなりません」と聲をひそめて、たしなめるやうな口調でいつた。

ある時、乳人は頻りに、夕占問をして見るといつて、姫にすゝめた。それは、日の暮に街の四つ辻へ出て、行人の言葉によつて身の吉凶を判断する、至極簡単な方法であるが、不思議にあたるものだといつた。

ちやうど三月の末の或日の夕方、姫は中門のほとりに佇んで、前栽の山吹が遣水の面に散つてゆくのを、ぼんやりと眺めて居たが、ふと「夕占問」の話を想ひうかべると、何とはなしに好奇心に驅られながら、ひとりでふら／＼と邸の門を出ていつた。彼女の家は、二條の南、町尻の西にあたつて、二町ばかりの築土を繞らした、嚴めしい構であつた。そこから三條の通へ下つて、西へ眞直に辿つて行くと、路幅の廣い大宮の辻へ来る。姫はその辻の眞中に、北を向いたまゝ、暫くの間立つて居た。

内裏を退出する公卿か何かであらう、一臺の檳榔毛の車が、長い神泉苑の土塀に沿うて走り去つた外には、ひつそりとして人通も稀であつた。宵闇の迫つて居る往來の片隅には、あかみ痲疹で死んだらしい死骸が捨ててある。何處かの家で、八講がはじまつて居るらしく、法華經を誦する聲が、微に悲しく響いてくる。やがて大

路の北の方から、水干を着た一人の男が、笛を吹きながら悠々と歩いて來たが、姫の姿が眼に留まると、訝しさうに立ちとまつて、もしもそなたは路にでも迷ひなすつたか。でなくば早う内へおかけり。日のくれがたに、子供が表をうるついで居ると、人さらひに浚はれますぞと、姫の髪の毛を撫でながら、いたはるやうにいふのであつた。

その男の過ぎた後から、又二三人の男女が、足ばやに四つ角を横ぎつて行つた。けれども、誰も姫の様子をちよいと振向いて見るばかりで、別段聲をかけようともしない。姫はがっかりして、もと來た道へ戻らうとすると、折柄すた／＼と、尻切の草履の足音が、鳥の羽ばたきのやうに鳴つて、お姫さま、あなたは夕占問をなさいますか。かういつて、後から呼びかけた者がある。

見れば、年の頃六十餘の、銀のやうな白髪を生やした、眞白な装束

を纏うた姫である。落ち窪んだ眼には一杯に眼脂が溜つて、皺だらけの頬はいたましくこけて、口をきくたびに頤をわな／＼と顫はせて居る。あの路端の死骸といひ、この老人の風情といひ、悉達太子が迦毘羅城の門前で出遭つた、淨居天の化身ではあるまいかと、姫は乳人に聞かされた因果經の佛傳を、想ひおこさずには居られなかつた。

「あなたの望んでいらつしやることは、必ず成就いたしますよ。あなたは今にお后におなりなさいませう。あなたのお子様は、一天下の主におなりなさいませう。お姫様の行末は、この大宮の大路のやうに、廣く長くお榮えなさるでございませう。」
姫は、杖をあげて大路を指した。さうして、愛らしい姫のみめかたちを、しげ／＼と打守つた後、再びすた／＼と歩む影が、ほどなく青い夕靄の底に消えて行つた。

一四 夕占問 (その二)

曉を告げる鳥の啼く音が、頬りに表にきこえて居るけれど、御殿の内では、絶えず女房が、大殿油に油をさして廻つて居た。院の女御は、乳人の話の途中から、大さうお睡さうに、脇息に凭れておいでになつたが、やがて其のまゝおやすみになつた御様子である。俯伏に倚りかゝつていらせられて、御頭の長々と垂れたすべらかしのおん黒髪や、海部の摺裳のうへに、組入の天井の燈籠のあかりが、眩く落ちて、おん頂の黄金の釵子や、蝶鳥の銀絲の繡のあるお腰のあたりが、繪のやうに美しく、きら／＼と輝いて居る。

「女御さまがお休み遊ばしたやうでござります。お邪魔にならないやうに、靜に致して居りませう」と、一人の女房が云つた。
「いや／＼、もう夜が明けるのに、却つてお風を召すといけない。」

道長
藤原兼家の五
子
御堂關白

四人の公達
藤原兼家の子
道隆・道綱・道
兼・道長

道隆
藤原兼家の長
子
中關白

お起し申す方がいゝだらう。」
道長が斯う云ひながらお傍へ寄つて、「お眼覚めなさりませ、お眼
覚めなさりませ」と二三度くり返して云つた。
しかし女御は何のお答もなく、すや／＼と快げに眠つておいで
になるのである。

「夜が明けまする。お眼覚めなさりませ。」
道長はもう一遍、おん耳元へ近づいて、少しく聲を張り上げて云
つた。けれども依然としてお答がない。四人の公達が不審に思
つて、左右から言葉をかけ、脇息を揺つても、たゞぐつたりと頂垂れ
てのみおいでになる。

「お氣分がお悪うござりますか。」
かう云ひかけて、道隆が試みに女御のおん手を取つて見ると、そ
れは氷のやうに冷たくなつて居た。わづか半時前までは、御機嫌

の好かつた院の女御は、法華經の利益の物語の間に、もう事切れて
おいでになつたのである。

たわゝに撓つた牡丹の大輪をゆりおこすやうに、女房たちが御
遺骸を抱き参らせると、夕顔の花のやうな白いお顔には、御惱の影
だになく、らふたけたおん眉根の神々しさは、御存生中とかはりが
ない。人々は、あまりの事に涙も出ないで、此の不可解な御頓滅を、
怪しみ畏れるばかりであつた。

暫く立つてから、ふと、乳人が思ひついたやうに、
「きつと、元方卿の悪靈の業でござります。あの物怪は、何處まで
御一門に祟をすることか」と云つて、急にさめ／＼と泣き始めた。

父の右大臣兼家卿は、悪靈を退治して御命を喚び戻すやうに、あ
らんかぎりの手段をつくした。直ちに諸山の大徳や修験者を招
いて、女御のおん遺骸をもとのとほりに脇息に倚せ参らせ、その周

圍で盛んなる加持祈禱を行つたりした。耳を聳するやうな讀經の聲が室内に轟いて、護摩壇の火が、白綾の女御の御衣にあかくと燃え映つても、俯伏に伏し給ふ御頭は、遂に起きようとなさならなかつた。

かう云ふ混雜のうちに、庚申の夜は全く明け放れて、風のない、靜かな正月の空からは、大粒の雪が紛々と降つて居た。

女御の御最期は、或は御不運であつたかも知れない。しかし、女御が嘗て夕占問をなされた折の、嬭の言葉は偽ではなかつたのである。なぜと云ふのに、女御はおなくなりになつてから、程なく皇后の御位を贈られ、御子の居貞親王は、やがて帝の御位にお即きなされたのであつた。(兄弟に據る)

一五 法成寺

居貞親王
第六十七代三
依天皇

御堂

法隆寺

攝政殿

藤原頼通

道長の長子

殿の御前

藤原道長

藤原道長
(前賢故實)



今は御心地例ざまになりはてさせ給ひぬれば、御堂のこと思し急がせ給ふ。攝政殿、國々までさるべき公事をばさるものにて、まづこの御堂の事を先に仕うまつるべき仰言のたまふ。殿の御前も、この度生きたるは別事ならず、わが願のかなふべきなめり」と宣はせて、他事なくたゞ御堂におはします。方四町をこめて、大垣にして瓦葺きたり。さまざまに思しおきて急がせ給へば、夜の明るも心もとなく、日の暮るゝもくち惜しう思されて、夜もすがらは、山をたゝむべきやう、池を掘るべきさまを思しめぐらし、木を栽ゑなべさせ、さるべき御堂々々、方々さまざま、造りつゞけ給へり。御佛はなべてのさまにやはおはします。丈六の金色の佛を、數も知

らず造りなべ、北南と馬道をあけて、道をととのへ造らせ給ふ。鶏の鳴くも久しく思され、宵曉の御行も怠らず、やすきいも大殿ごもらず、たゞこの御堂の事のみ深く御心にしませ給へり。

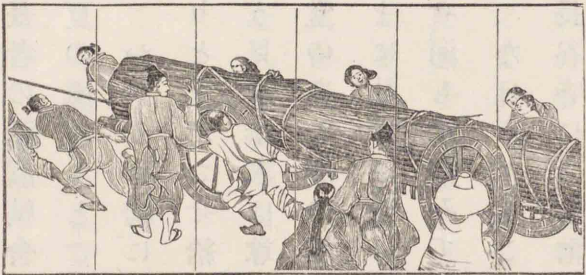
日々に多くの人々まゐりまかで立ちこむ。さるべき殿原をはじめ奉りて、宮々の御封御庄どもより、一日に五六百人千人の夫どもを奉るにも、人の數多かることをば、かしこきことに思したち、國々の守ども、地子官物はおそなはれども、たゞ今はこの御堂の夫役材木檜皮瓦なども多く参らする事を、我もくんと競ひ仕うまつる。大方近きも遠きも参りこみて、品々方々あたりあたりに仕うまつる。

或所を見れば、御佛仕うまつるとて、佛師ども



法成寺造營
(尾竹坡筆)

百人ばかりなみ居て仕うまつる。同じくはこれこそめでたけれと見ゆ。御堂の上を見上ぐれば、匠工どもも二三百人のぼり居て、大きな木どもには太き綱をつけて、聲をあはせて、えさまさと引上げさわぐ。御堂の内をみれば、佛の御座作りかゞやかす。板敷をみれば、木賊・椋の葉などして、四五十人並み居て手ごとに磨き拭ふ。檜皮葺壁塗瓦作なども數をつくしたり。又年老いたる翁などの、三尺ばかりの石を、心に任せ、て切り整ふるもあり。池を掘るとて、四五百人おりたち、山を疊むとて、五六百人のぼりたち、又大路の方をみれば、力車に、えもいはぬ大木どもに綱をつけて、叫びの、しり引きもてのぼる。賀茂川の方をみれば、筏といふものに、樽材木をいれて、棹



須達長者
天竺舍衛國の
富豪

さして、心ちよげに謠ひの、しりて、もてのぼるめり。磐石といふばかりの石を、はかなき筏にのせて率てきたれど沈まず。すべていろいろさまざま、言ひつくしまねびやるべき方なし。かの須達長者の祇園精舎つくりけんも、かくやありけんと思ゆるを、冬の室夏の風、各ことごととなり。

かゝる御勢にそへて、入道させ給ひて後は、いとゞ勝らせ給へりと思えさせ給ふにも、なほなべてならざりける御有様かなと、近う見奉る人は尊み、遠く見奉る人は遙に拜み参らす。今は、この御堂のあたりの本草ともならんと思へる人のみ多かり。そなたさまに赴けば、海の浪もやはらかにたちて、この御堂の物をもて運ばせ、河も水澄みて、快くうかべもて参ると見ゆ。

なほなべて、この世のこととは見えさせ給はず。まづは、先年に長谷寺にある僧の御祈禱をいみじうして寝たりける夢に、大きに

いかめしき男の出できて、何か、かく殿の御事をば、ともかくも申したまふ。弘法大師の佛法興隆の爲に生まれたまへるなり」とぞ、見えさせたまひける。

また天王寺の聖徳太子の御日記には、王城より東に、佛法弘めん人を我と知れ」とこそは、書置かせ給ふなれ。いづれにても、おろかならぬ御事なり。(榮華物語)

一六 光あれ

姉崎 正治

人間は、あまり此の世界に慣れすぎた。何物も、今ある如く昔から存し、萬事すべて成行のまゝになるものとして敢て怪まず、その日その日をすごす。

兒童は世界新來の客として、驚異の目を瞳つて事々に疑問をおこし、何物に對しても起原或は聯絡の説明を求めるが、それも次第

に世に慣れ、漸次に説明をつけて、終には疑をもおこさず、好奇心をも動かさなくなる。然るに、若し人あつて俄に此の世に生まれ、而も成熟した心を以て四圍の世界を覽、人生の事を考へたならば、世界の一事一物、皆驚歎の種となり、疑問の材料となるに違ひない。

その疑問に對して、今日の科學はそれ、説明を與へはするが、さて萬事萬物の究竟起原となれば、無始無終といふより外はない。進化論で説明しても、其の至極のはじめは、終に混沌の闇に入らざるを得ない。こゝに於てか、我等の想像力は、大能の神靈が世界を創造するはじめといふ事を想はしめる。ユダヤ神話、創世記の開卷は此の想像を述べて曰く、

はじめに神天地を造り給へり。地は形なくして空しく、闇淵の面にあり。神の靈、水の面を覆ひたりき。

萬有混沌として、天地は一の闇の中に閉ぢられた。水とも雲とも

分かれ、濃氣が全宇宙を籠めて居た。そこへ闇の中に、

神「光あれ」とのたまひければ、光ありき。神は光と闇とをわかち給へり。夕あり、朝あり、これ首の日なり。

嗚呼、此の一言ほど有力な、また不思議な言葉が、他にあらうか。一言で常闇の天地に光明が生じ、未來億萬年に互るべき晝夜の區別が出来た。それから、神が「水あれ」と云へば、水が出来、天の大空と地の大海とが二つにわかれ、又神が「土」といひ、「青草」といひ、鳥を呼び、獸を呼べば、一切萬物が其の聲に應じて生ずる。かくして、天地と萬物とが成立つたと云ふ。

これは神話であり、想像である。従つて萬物成立の説明としては、我々の理性には合はない。併し、理性的説明のみが唯一の解釋であるとはいへず、又宇宙のはじめのみが「光あれ」の言に發したとする必要もない。此の如き創造の事實は、我々の生活に於て日々

に經驗し得ることではなからうか。
人の心は物に引かれ、事に動かされ、四圍とともに變じ、事情に隨つて推移して、止まる所を知らず、見る物、聞く事、一として全然自分で支配し得るといふものはない。其の上、思ふ事、欲する所も、變轉もすれば、突發もする。由つて來る所を知らず、落着く先も、自分ながらに測り得ない。意馬は隱見し、心猿は跳梁する。若し自然に任せるならば、吾等の心は亂雜變轉の世界に彷徨する外なく、唯現在刹那の意識は明かでも、其の前後左右は混沌の大溟に没する外ない。然るに、そこに何か心を統御するに足る觀念がうかび、又は精神の底に透徹する靈感に接し、或は一生を支配すべき理想を體得すれば、混沌の闇は觀念、理想の光明に破られ、精神の世界は靈の朝ぼらけに目がさめる。此の如き精神の靈感は、聲こそなければ、實に「光あれ」の天籟にも比すべき創造力を發揮して、今まで意馬心猿

の跳梁に委した混沌は、光あり、力あり、一貫の命ある宇宙コスモスとなる。かく觀じ來れば、創世記の空想は單に世界萬物のはじめを説いたものでなく、刹那々々の我等が心にもおこるべき大創造を描き、我々各個の心靈が發揮し得べき原造の事實を示したものと思はれる。

浮世の紛々たるに心亂れ氣濁つた時、我が心に斯くすべしとの決斷を得たならば、これ世務の混沌を照らす光でないか。天地萬象を研究し、難題、疑問の中に針路を失つて五里霧中に彷徨する際、一條の理路を發見し、快刀亂麻を斷つて眞理の光明に逢着するも、亦「光あれ」の不思議であるまいか。若しくは又、藝術家が、天然、人事の中に美の靈を捕へ得て、畫帖の上に、又は木石の中に、これを表現する時、「光あれ」の創造力を示すではないか。音樂家が天來の音に心耳を澄まして、これを樂譜に捕へるのも、詩人が靈感を歌ひ出す

のも、また「光あれ」の一聲、混沌の世界を破るに等しいものがあるであらう。

精神の創造力、是いつまでも正體の捕はれない不思議であるが、而もまた實に、人生に於ける高く貴くゆかしき生命の源泉である。萬物の生々を貫いて生命あり、世事の紛々を超えて光明ある人生の眞味、人間の眞價値は、一に此の創造力の賜ではないか。特に信念生活の力は、紛擾多端、罪障重疊の人生に直入の一路を開き、智慧の光で無明の闇を破り、慈悲の暖かみに煩惱の氷も解かす。攝取の光明といひ、救の恩寵といふも、一に此の小我が宇宙の大神靈と感應道交して、混沌の中に「光あれ」の御言に接する經驗を指すにほかならぬ。

思へば、人生始まつて以來、無常の世相を超えて常住の光明に浴し、破綻百出の人生に一貫の理想を發見し、五十年蜉蝣の此の生に

も、永遠の生命を體得し得た人にして、其の信仰開發の大事に際して、混沌の闇の中に「光あれ」の御言に接した思をなさなかつた者が、果してあるであらうか。信念の力はこゝにある。人生の價値は、實に此の如き光明の新生命が齎すのである。「光あれ」。これ單に太初の創世に限らぬ。人生美はしきものあり、眞理に順ふ生活ありて、その理想の力の現れる處には「光あれ」の御言が常にきこえ、其の不思議の創造力が絶えず躍動してゐるのである。(光あれ)

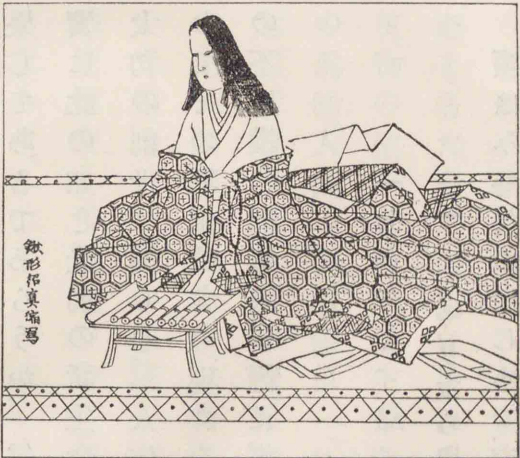
一七 古文寸錦

一 人やりならぬ道

頃はみ冬たつはじめの、定めなき空なれば、降りみ降らずみ、時雨もたえず、嵐にきほふ木の葉さへ、涙とともにみだれちりつゝ、事にふれて心細くかなしけれど、人やりならぬ道なれば、いき憂しとて

もとどまるべきにもあらで、何となく急ぎたちぬ、
めかれせざりつる程だに、荒れまさりつる庭もまがきもまして

侍従
藤原爲相
大夫
藤原爲守
阿
佛
尼



と見まはされて、慕はしげなる人々の
袖の雫も、慰めかねたる中にも、侍従・大
夫などの、あながちに打屈したるさま、
いと心苦しければ、さまざまにいひこ
しらへぬ。
代々に書きおかれける歌の草子ど
もの奥書して、あだならぬかぎりを選
りしたゝめて、侍従の方へ送るとて、書
き添へたる歌、

和歌の浦にかきとどめたる藻鹽草

これを昔のかたみとも見よ

大夫の傍さらず馴れ來つるを、振捨てられなん名残あながちに
思ひ知りて、手ならひしたるを見れば、

はるくゝと行くさき遠く慕はれて

いかにそなたの空をながめん

と書きつけたるものより殊にあはれにて、同じ紙に書添へつ、

つくづくと空ながめそ戀ひしくは

道とほくともはやかへりこん

とぞなぐさむる。(十六夜日記に據る)

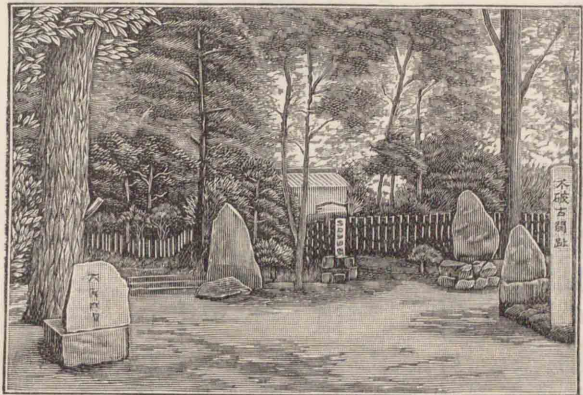
二 旅寝の月

柏原といふ所を立ちて、美濃の國關山にもかゝりぬ。谷川、霧の
底に音づれ、山風、松の梢にしぐれわたりて、日影も見えぬ木の下道、
哀にも心細し。越果てぬれば不破の關屋なり。萱屋の板底、年經
にけりと見ゆるにも、後京極攝政殿の、あれにし後は只秋の風とよ

後京極攝政
藤原良經

あれにし云々
人すまぬ不破
の關屋の板庇
あれにし後は
只秋の風
(新古今集)

不破關趾



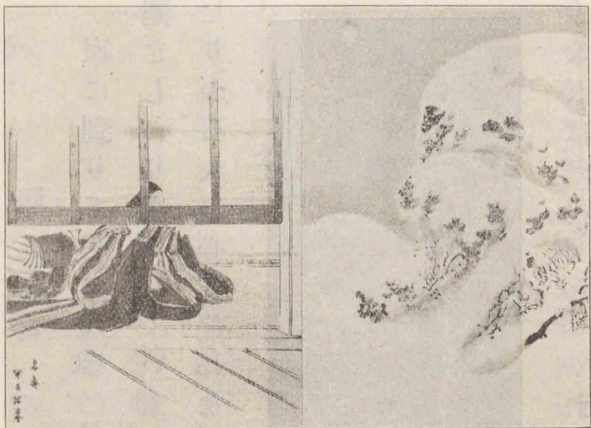
雲に送るなど、ある家の障子にかきつくるついでに、

ませたまへる歌思出でられて、この上は風情もめぐらし難ければ、
賤しき言の葉を残さんもなかくに覺えて、ここをば空しくうち
過ぎぬ。

くひぜ河といふ所にとまりて、夜更く
る程に、川端に立出でて見れば、秋の最中
の晴天清き河瀬にうつろひて、照る月な
みも數見ゆばかり澄み渡れり。二千里
の外の古人の心遠く思ひやられて、旅の
思いと抑へ難く覺ゆれば、月の影に筆
を染めつゝ、花洛を出でて三日、株瀬川に
宿して一宵、屢、幽吟を中秋三五夜の月に
傷ましめ、かつがつ遠情を先途一千里の

宮

一條天皇の皇
后藤原定子
香爐峰の雪
遺愛寺鐘聲敬
枕聽 香爐峰
雪撥 簾看
(白氏文集)
香爐峯の雪
(梶田半古筆)



三 香爐峰の雪

知らざりき秋の半の今宵しも

かゝる旅寝の月をみんとは (東關紀行)

雪いと高く降りたるを、例ならず御
格子まゐらせて、炭櫃すすびに火おこし、物語
などして集まり侍ふに、宮、少納言よ、香
爐峰の雪はいかならん」と仰せられけ
れば、御格子あげさせて、御簾高く捲き
上げたれば、笑はせたまふ。人々も皆
さることは知り、歌などにさへうたへ
ど、おもひこそよらざりつれ。人々、な
ほこの宮の人にはさるべきなめりと
いふ。(枕草子)

四 我が宿

家に到りて門に入るに、月あかければいとよくありさま見ゆ。聞きしよりまさりて、いふかひなくぞこぼれ破れたる。家を預けたりつる人の心も、荒れたるなりけり。中垣こそあれ、一つ家のや

傳貫之筆蹟

まほ飽かずやあらん、またなん、
見し人を松の千年に見ましかば
とほくかなしき別せましや
忘れがたくくち惜しきこと多かれど、えつくさず。
（土佐日記）

うなれば、望みてあづかれるなり。されば、たより毎に物も絶えず得させたる。「こよひかゝる事」と、聲高に物もいはせず、いとほつらく見ゆれど、志はせんとす。さて池めいてくぼまり、水づける所あり。ほとりに松もありき。

五年六年の中に、千年や過ぎにけん、片枝はなくなりけり。いま生ひたるぞ交れる。大方みな荒れにたれば、あはれとぞ人々いふ。思ひいでぬことなく思ひ戀しきが中に、この家にて生まれし女子のもろともに歸らねば、いかがは悲しき。船人も皆子抱きての、しる。かゝるうちになほ悲みに堪へずして、ひそかに心知れる人といへりける歌。

生まれしも歸らぬものをわが宿に

小松のあるを見るがかなしき

とぞいへる。

なほ飽かずやあらん、またなん、

見し人を松の千年に見ましかば

とほくかなしき別せましや

忘れがたくくち惜しきこと多かれど、えつくさず。
（土佐日記）

惟喬親王

文德天皇第一

の皇子

右馬頭

在原業平

在原業平

五 小野の深雪

昔、水無瀬に通ひ給ひし惟喬親王、例の狩しにおはします。御伴に右馬頭なる翁つかうまつれり。日頃経て、宮に歸り給ひけり。

御おくりして、とくいなんと思ふに、おほみき賜ひ、祿たまはんとて、遣はさざりけり。この右馬頭心もとながりて、



枕とて草ひき結ぶ事もせじ秋の

夜とだに頼まれなくに

とよみける。時は彌生のつごもり

なりけり。親王大殿ごもらであかし給ひてけり。

かくしつゝ、まうで仕うまつりけるを、おもひのほかには、御髪おろさせ給ひてけり。睦月に拜み奉らんとて、小野にまうでたるに、比

叡の山の麓なれば、雪いと高し。しひて御室にまうでて拜み奉るに、つれづれといと物悲しくておはしましければ、やゝ久しく侍ひて、いにしへの事など思ひいでてきこえさせけり。さてしも侍ひてしがなと思へど、おほやけ事どもありければ、え侍はで、夕ぐれにかへるとて、

忘れては夢かと思ふおもひきや

雪ふみわけて君を見んとは

とてなん泣くくきにける。(伊勢物語)

一八 藝術の三昧境

厨川 白村

人間の日常生活においては、無限に昂揚飛躍しようとする生命力や自我衝動が、必ず何等かの抑圧作用を受けて阻止される。其處に苦悶が生ずる。そして、此の苦悶は胸底の奥深く隠れて、當人

自身にも気づかれぬ無意識心理の蔭に潜む「心の痛手」となつて残る。而も潜みながらも、隠れながらも、此の苦悶は、絶大の力を以て其の當人の心的生活の全部を搔廻し、個性の神髓となり中核となつて、其の全生活を左右して居る。それは、日常の業務などに従事し、極めて外面的な生活をして居る時には、全く無意識界の底に葬られて居るが、一旦睡眠状態とか、藝術製作とか、觀劇とか、文藝鑑賞とか、さう云ふすべて我々が通俗生活を離れたときにおいて、この苦悶、この心的傷害は突如として擡頭して、象徴の衣を纏ひ、夢幻の形となつて出現してくる。文藝の創作と鑑賞とは、二つながら此の心理を基礎として成立するものだ。そして、それは象徴化された夢幻の境地にあるもので、此の「夢」の生活において、我等は、日常の通俗的、表面的、外面的生活に於けるよりも、一層深く一層突込んだ沈潜的、内面的生活を體驗しつゝあるのだ。此處に抑壓と離れ

た、絶對的に自由な創造生活が成立する。

夢の世界において、我等は決して眠つて居るのではなく、眞の意味において、實は目覺めて居るのだ。否、覺醒時よりも、もつと人として、また藝術家として、——さうだ、其の時は如何なる人も皆藝術家だ。——純眞な活動をなし、觀照をなすことが出来るのだ。意識状態が更に鋭く集注的となつて、恰も或物象の上に強い光線が投げられた時と同じく、一層際立つた明暗の度が付き、平素は氣づかないやうな陰影の微さへも捉へ、姿、形、動きなどが精妙を極めて心に映ずる。肉眼を見開いて居る時よりも、自分の心の一層深い處には、はつきりと現實の相を捉へることが出来る。内へむかつて、靈界へむかつて、鋭く見開かれた心眼が、隈なく亘渡つた時の状態だ。文學者が筆を執る時、俳優が舞臺に立つ時、彫塑家が鑿を執つて大理石へむかふ時、更に又詩歌、小説を讀んで強い感激に打たれる時、

悲劇を観て袖を絞る時、名畫に對して恍然として酔はされる時、すべて鑑賞においても、また創作においても、此の夢の心境にまで踏入らない者は、まだ藝術の三昧境に入つたものでない。



獅子

始めて現實を凝視し靜觀し觀照し、また批評し味識することが出来るので、例へば動物園のライオンの雄姿を見て、山野に咆哮する

昔から文藝の快感には、無關心といふことが要素であると説かれたのも、畢竟此の點を指したのだ。即ち實利生活、通俗生活の境地から一歩踏出し、それを離れて尙深きに没入してこそ、

其の生活までも想ふやうな場合、若し其處に鐵柵の隔てがなかつたら、我々は猛獸の危険が身に迫るといふ恐怖のために、到底ライオンの眞の姿を凝視し靜觀することは出来ない。其處に檻の鐵柵が、我と彼とを隔てて、我を無關心の状態に置いてくれるから、此の藝術的觀照は成立つのだ。ハイカラな氣障な扮装をした男が、石に躓いて倒れたとする。それは確に滑稽な場面だ。しかし、其の男が若し自分の親兄弟か何かであつて、直接自分との間に利害關係や、實際上のインテレストがあると、我々は一場の痛快な滑稽味として、喜劇的場面として、これを受取ることが出来ない。それが自分の實際生活との間に、ある餘裕と距離とが存すればこそ、此の場面を現實として深く感味することが出来るのだ。「夢」の中において、一層寫實的に觀照することが出来、藝術家としての眞の活動を爲すことが出来る所以は即ちこゝにある。

Waking

或人が言つた、五感の中、藝術の根本となるものは視覚と聴覚とだけだ」と。即ち此の二感覺は、他の味覺・嗅覺・觸覺のやうに直接的實際的でなく、其處に現實と或距離がある。即ち視覺や聴覺は、距離を隔てて觸れるのである。如何に肌ざはりの好い天鵞絨でも、おいしい料理でも、それは決して完全な詩でもなく藝術でもない。料理人は藝術家だとはいはれない。觸覺や味覺には此の「隔たり」がない爲に、それ自らでは、文藝の領域にはひることの出来ない感覺だ。それは藝術的たるべく、餘りに肉感的であり實際的であるからだ。ライオンの檻の鐵柵がない場合と同じいからだ。以上「夢」と云ふのは、實際的の日常生活を離れて居ると云ふ意味である。更に適切にいへば、醒めたものの白日の夢、詩人の所謂ウェーキング・ドリームに外ならないのだ。

此の「非實際的」であると云ふことが、我々をして、利己的情慾や其

江月筆

他種々の雑念の煩累から離脱させることによつて、絶對自由の囚はれない創造生活の心境を現する。即ち、あらゆる抑壓から放たれ淨化された藝術生活・批評生活・思想生活は、此の非實際的・非實利的といふことを、最大要件の一つとして成立する。



美しい庭園
を見てはこれを
己の所有にしよ
うとし、黄金を見
ては、自ら富まう

と思ふのは、人々の實際生活に於ける心境で、若しそれだけで終始するなら、それは動物生活・俗物生活であつて、靈的・精神的方面を有する眞の人間生活ではない。我々の生活が實利・實際といふものから淨化され醇化されて、離れて見ることの出来る「夢」の境地に入

つてこそ、其處に始めて我々の生命は高められ深められ、強調され擴大されるのだ。渾沌として無秩序、無統一のやうな此の世界が、一つの纏まつた、秩序のあり統一のある世界として觀照されるのは、唯それ「夢の生活」に於てだけだ。

實際的といふことから生ずる雜念の曇を拂うて、清朗一碧、さながら明鏡、止水のやうな心境に入る時、其處に藝術的觀照生活の極致が到來するのだ。

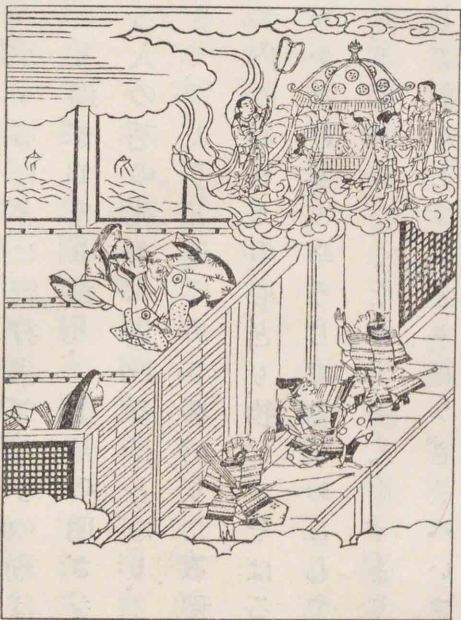
かやうに、「白日の夢」においては我等の肉眼は閉ぢて、心眼が開ける。それは即ち靜思觀照の三昧境裡に入つた時だ。實行を離れ、慾念を脱し、外圍の紛々擾々を逃れて到達した自由の美郷だ。叡智靈光は、さながら天心に懸かる明月のやうに、其の一切を照らして居る。この幻像この情景は、これを象徴によつて表現する外に道はない。(厨川白村全集)

一九 不死の藥

かゝるほどに、宵打過ぎて、子の刻ばかりに、家のあたり晝の明さにも過ぎて光りたり。望月の明さを十あはせたるばかりにて、ある人の毛の孔さへ見ゆるほどなり。大空より、人、雲に乗りておきて、地より五尺ばかりあがりたる程に、立ち連ねたり。これを見て、内外なる人の心ども、物におそはるゝやうにて、あひ戦はん心もなかりけり。辛うじて思ひおこして、弓矢をとりたてんとすれども、手に力もなくなりて、痿えかゞまりたる中に、心さかしき者、ねんじて射んとすれども、ほかざまへいきければ、え戦はで、心ちたゞしれにしれて、まもりあへり。

立てる人どもは、裝束さうぞくの清らなること物にも似ず。飛ぶ車一つ具したり。羅蓋らがいさしたり。その中に、王とおぼしき人、家みやに、みやつ

こ磨まうでこといふに、猛く思ひつるみやつこ磨も、物に酔ひたる心ちして、うつぶしにふせり。いはく、汝をさなき人、いさゝかなる功德を翁つくりけるによりて、汝がたすけにとて、片時のほどとて



降ししを、そこらの年頃、そこらの金賜ひて、身をかへたるが如くなりけり。かぐや姫は罪を作り給へりければ、かく賤しきおのれが許に、しばしおはしつるなり。罪のかぎり果てぬれば、かく迎ふるを、翁は泣き歎く、あたはぬ事なり。はやかへし奉れといふ。翁答へて申す、かぐや姫を養ひ奉ること二十餘年になりぬ。片時と宣ふにあやしくなり侍りぬ。

かぐや姫昇天
(古版竹取物語挿繪)

また他所こゝろに、かぐや姫と申す人ぞおはしますらんといふ。「こゝにおはするかぐや姫は、重き病をし給へば、え出でおはしますまじ」と申せば、その返事はなくて、屋の上に飛ぶ車をよせて、「いざ、かぐや姫きたなき所にいかでか久しくおはせん」といふ。たてこめたる所



かぐや姫
(安田親彦筆)

の戸、即ちたゞあきにあきぬ。格子どもも、人はなくしてあきぬ。嫗抱きてゐたるかぐや姫、とに出でぬ。えとゞむまじければ、たゞさし仰ぎて泣きをり。竹取心まどひて泣き伏せる所によりて、かぐや姫いふ。「こゝに

も心にもあらでまかるに、昇らんをだに見送り給へ」といへども、何しに悲しきに見おくり奉らん。我をばいかにせよとて、捨てては昇り給ふぞ。具してゐておはせね」と泣きて伏せれば、御心まどひぬ。「文を書きおきてまからん。戀ひしからん折々、取出して見給へ」とて、打泣きて書く言は、「この國に生まれぬるとならば、歎かせ奉らぬほどまで侍るべきを、侍らで過ぎ別れぬること、かへすべし。本意なくこそおぼえ侍れ。脱ぎおく衣を形見と見給へ。月の出でたらん夜は見おこせ給へ。見捨て奉りてまかる空よりも落ちぬべき心ちす」と書きおく。

天人の中に持たせたる筈あり。天の羽衣入れり。又あるは不死の藥入れり。ひとりの天人いふ、壺なる御藥奉れ。きたなき所の物きこしめしたれば、御心ちあしからんものぞ」とて、持てよりたれば、いさゝか嘗め給ひて、少し形見とて、脱ぎおく衣に包まんとす

れば、ある天人包ませず、御ぞを取出だして着せんとす。その時にかぐや姫「しばし待て」といひて、衣着せつる人は、心ことになるなり。もの一言いひおくべき事ありけり」といひて文書く。天人「遅し」と心もとながり給ふ。かぐや姫「もの知らぬ事な宣ひそ」とて、いみじくしづかに、おほやけに御文奉り給ふ。あわてぬさまなり。「かく數多の人を賜ひてとゞめさせ給へど、許さぬ迎まうできて、取りおてまかりぬれば、くち惜しく悲しきこと、宮仕つかうまつらずなりぬるも、かく煩はしき身にて侍れば、心得ず思召しつらめども、心強く承らずなりにし事、なめげなるものに思召しとゞめられぬるなん心にとまり侍りぬる」とて、

今はとてあまの羽衣きるをりぞ

君をあはれと思ひいでける

とて、壺の藥そへて、頭中將をよびよせて奉らす。

中將に、天人とりて傳ふ。中將とりつれば、ふとあまの羽衣うち着せ奉りつれば、翁をいとをしかなしと思しつる事もうせぬ。この衣きつる人は、物思もなくなり、にければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して昇りぬ。その後、翁、媪、血の涙をながして、惑へどかひなし。あの書きおきし文を讀みて、きかせけれど、何せんにか命もをしからん。誰が爲にか何事もやうもなし」とて、薬もくはず、やがて起きもあがらで病みふせり。

中將、人々引具して歸り参りて、かぐや姫を、え戦ひとめずなりぬる事を、こまぐと奏す。薬の壺に御文そへてまゐらす。ひろげて御覽じて、いといたくあはれがらせ給ひて、物もきこしめさず、御あそびなどもなかりけり。大臣、上達部をめして、「いづれの山か天に近き」と問はせ給ふに、ある人奏す、駿河の國にあるなる山なん、この都も近く、天も近く侍ると奏す。これをきかせ給ひて、



(筆夫忠村吉)

天昇姫やぐか

山部赤人
歌聖
聖武天皇時代
の人

あふこともなみだにうかぶ我が身には
死なぬくすりも何にかはせん

かの奉る不死の薬の壺に、御文具して御使にたまはす。勅使には
調岩笠といふ人をめして、駿河の國にあなる山の頂にもてゆくべ
き由おほせ給ふ。嶺にてすべきやう教へさせ給ふ。御文、不死の
薬の壺ならべて、火をつけてもやすべきよし仰せ給ふ。その由う
けたまはりて、つはものども數多具して、山へ登りけるよりなんそ
の山をふじの山とは名づけける。その煙、いまだ雲の中へ立昇る
とぞいひ傳へたる。(竹取物語)

二〇 不盡山

一 望不盡山歌

あめつちの わかれし時ゆ

山 部 赤 人

かむさびて 高くたふとき
するがなる ふじの高嶺を
あまの原 ふりさけ見れば

山邊邦人

五位世神龜元年十月五日紀伊國行
幸在佐時作歌

わたりて かくらるる
あまの原 かくらるる



わたる日の かげもかくろひ
照る月の ひかりも見えず
白雲も いゆきはぐかり
ときじくぞ 雪はふりける

山部 赤人

語りつぎ 言ひつぎゆかむ

ふじの高嶺は

反歌

たごの浦 ゆうちいでて見ればましろにぞ
ふじの高嶺に雪はふりける

二 詠不盡山歌

作者 不詳

なまよみの 甲斐の國
うちよする 駿河の國と
こちごちの 國のみなかゆ
いでたてる ふじの高嶺は
あま雲も いゆきはぐかり
飛ぶ鳥も 飛びものぼらず

燃ゆる火を 雪もてけち
 降る雪を 火もてけちつゝ
 いひもえず 名づけも知らに
 あやしくも います神かも
 せの海と 名づけてあるも
 その山の つゝめる海ぞ
 ふじ河と 人のかたるも
 その山の 水のたぎちぞ
 日本の やまとの國の
 しづめとも います神かも
 たからとも なれる山かも
 駿河なる ふじの高嶺は

みれどあかぬかも

反歌

ふじのねに降りおける雪はみなづきの

もちにけぬればその夜ふりけり

二一 羽衣

羽衣
 シテ天女
 ワキ白龍
 ワキツレ漁夫
 風早の
 風早の三保の
 浦わをこぐ舟
 の浦人騒ぐ波
 立つらしも
 (萬葉集)
 忘れめや
 忘れずよ清見
 が關の波間よ
 りかすみて見
 えし三保の松
 原(續古今集)

一ワキ「風早の、三保のうらわを漕ぐふねの、浦人さわぐ波路かな。」

サシ「これは三保の松原に、伯龍と申す漁夫にて候。ツレキ「萬里の好」

山に雲忽におこり、一樓の明月に雨はじめてはれたり。げにのど
 かなる時しもや、春のけしき松原の、波立ちつゞく朝霞、月ものこり
 の天の原及びなき身の眺にも、心そらなるけしきかな。「忘れめや、
 山路を分けてきよみ渦、遙に三保の松原に、立ちつれいざや通はん。
 風むかふ、雲のうき波立つと見て、釣せで人や歸るらん。待てしば

風むかふ
風むかふ雲の
浮波立つと見
て釣せぬ先に
かへる舟人
(藤原爲相)

天人
筆谷等觀筆

し、春ならば、吹くものどけき朝風の、松は常磐の聲ぞかし。波は音なき朝なぎに、釣人おほき小船かな。

詞「われ三保の松原にあがり、浦の景色をながむる處に、虚空に



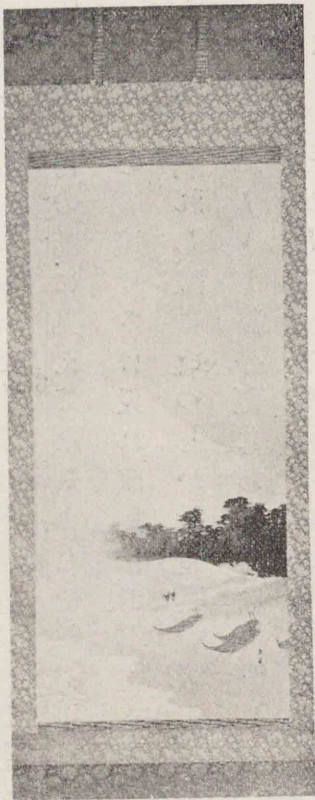
花降り音
樂きこえ、
靈香四方
に薫ず。
これ唯事
と思はぬ

處に、これなる松に、美しき衣懸れり。寄りて見れば色香妙にして、常の衣にあらず。いかさま取りて歸り、古き人にも見せ、家の寶となさばやと存じ候。

シテ「なう、其の衣は此方こなたのにて候。何しに召され候ふぞ。ワキ

三保松原
(河合玉堂筆)

「これは拾ひたる衣にて候程に、取りて歸り候ふよ。シテ「それは天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべきものにあらず。もとの如くに置き給へ。ワキ「そも此の衣の御主とは、さては天人にてましますかや。さもあらば、末世の奇特に留めおき、國の寶となすべきなり。衣を返すことあるまじ。



シテ「悲しやな、羽衣なくて、飛行の道も絶え、天上に歸らんことも

叶ふまじ。さりとは返したび給へ。

ワキ「此の御詞を聞くよりも、いよく伯龍力を得、詞もとより

此の身はこゝろなき、あまの羽衣取隠し、叶ふまじとて立ちのけば、

諺^{シテ}「今はさながら天人も、羽なき鳥の如くにて、あがらんとすれば
 衣なし。」^{ワキ}「地にまた住めば下界なり。」^{シテ}「とやあらん、かくや
 あらんと悲しめど、」^{ワキ}「伯龍衣を返さねば、」^{シテ}「力及ばず、」^{ワキ}
 諺^{シテ}「せん方も、地なみだの露の玉鬘、かざしの花もしをく」と、天人
 の五衰も、目の前に見えてあさましや。

^{シテ}「天の原振りさけ見れば、霞たつ、雲路までひて、ゆくへ知らず
 も。」^地「住馴れし、空にいつしか行く雲の、羨ましき景色かな。迦陵
 頻伽の馴れくし、聲今更にわづかなる、雁がねの歸り行く、天路を
 聞けばなつかしや。千鳥、鷗の沖つ浪、往くか還るか、春風の、空に吹
 くまでなつかしや。」

^{ワキ}「いかに申候。御姿を見奉れば、餘りに御痛はしく候程に、衣
 を返し申さうずるにて候。」^{シテ}「あら嬉しや、此方へ賜はり候へ。」
^{ワキ}「暫く、承りおよびたる天人の舞樂、只今こゝにて奏し給はば、」



(人天の能)

衣 羽

二神
伊弉諾伊弉册
の二神

衣を返し申すべし。シテ「うれしや、さては天上に歸らんことを得たり。このよろこびにとてもさらば、人間の御遊の形見の舞、月宮を廻らす舞曲あり。只今こゝにて奏しつゝ、世のうき人に傳ふべし。さりながら、衣なくては叶ふまじ。さりとはまづ返し給へ。ワキ「いや、此の衣を返しなば、舞曲をなさでその儘に、天にやあがり給ふべき。シテ「いや、疑は人間にあり。天に偽なきものを。ワキ「あら、はづかしや。さらばとて、羽衣を返し與ふれば、シテ「少女は衣を着しつゝ、霓裳羽衣の曲をなし、ワキ「天の羽衣風に和し、シテ「雨に潤ふ花の袖、ワキ「一曲を奏で、シテ「舞ふとかや。地「東遊の駿河舞、此の時やはじめなるらん。地「それ久方のあめといつば、二神出世のいにしへ、十方世界を定めしに、空は限もなければとて、久方の空とは名づけたり。シテ「然るに月宮殿の有様、玉斧の修理とこしなへにして、地「白衣黒

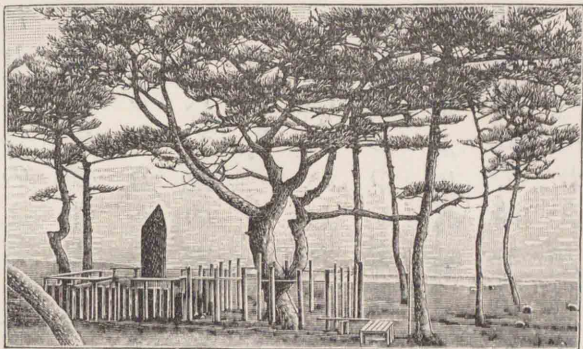
衣の天人の、敷を三五にわかつて、一月夜々の天少女、奉仕をさだめ
役をなす。シテ「我も敷ある天少女、地月の桂のみをわけて、假に

春霞

春霞たなびき
にけり久方の
月の桂の花や
咲くらん
(紀貫之)

羽衣の松

天つ風
天つ風雲の通
路ふきとちよ
少女の姿しば
しとゞめん
(僧正通昭)
君が代は
君が代は天の
羽衣まれにき
てなづともつ
きぬ巖なるら
ん
(拾遺集)



れにきて、地撫づとも盡きぬいはほぞと、聞くも妙なり東歌、聲そ

東の駿河舞、世に傳へたる曲とかや。

クセ「春霞、たなびきにけり久方の、月の桂も

花や咲く、げに花鬘色めくは、春のしるしか

や、面白や天ならで、こゝも妙なり天つ風、雲

の通路吹閉ぢよ、少女の姿暫しとゞまりて、

此の松原の春の色をみほがさき、月清見湯、富

士の雪、いづれや春の曙、たぐひなみも松かぜ

も、のどかなる浦の有様、其の上天地は、何を

隔てん玉垣の、内外の神のみするにて、月も曇

らぬ日の本や、シテ「君が代は、あまの羽衣ま

へて數々の、笙、笛、琴、篳篥、孤雲のほか、にみちく、て、落日の紅は蘇命

路の山をうつして、緑は波にうき島が、はらふ嵐に花ふりて、げに雪

を廻らす白雲の袖ぞ妙なる。シテ「南無歸命月天子、本地大勢至、

地「東遊の舞の曲、シテ「或は天つみそらの緑の衣、地「又は春たつ

霞の衣、シテ「色香もたへなり少女のもすそ、地「左右左、さいう颯

颯の花をかざしの天の羽袖、靡くも返すも舞の袖、キリ「東遊のか

ずかずに、其の名も月の宮人は、三五夜中のそらにまた、満願真如の

影となり、御願圓滿、國土成就、七寶充滿の寶をふらし、國土にこれを

施し給ふ。

さるほどに時移つて、天の羽衣浦風に、たなびきたなびく三保の

松原、うき島が雲の、あしたか山や富士の高嶺、かすかになりて、天つ

御空の霞にまぎれて失せにけり。(觀世流謠曲)

小宮豊隆
現代の文學者
夏目漱石の門
下

二二 能樂論

小宮 豊隆

一切の藝術の極致は、それが神的なものになる點にある。さうして、一つの藝術が神的なものになる爲には、必然に、其藝術家の人格の渾然たる完成が、豫件とされなければならぬ。渾然として完成した藝術家の人格から、必至に迸り出た藝術は、寔に理非の境界を絶して、只管に仰望と追隨との對象になるばかりである。この意味に於て我々は、古來の偉大なる藝術家の偉大なる藝術を尊敬し若しくは渴仰する。

然も、この尊敬やこの渴仰は、其の特別な境地に到り得た個人、若しくは其個人の藝術に限つて向けらるべきものであつて、個人を離れて、藝術の諸形式の内なる特定の形式一般に向けらるべきものではない。能樂に即して云へば、この感情は、能樂師何の誰とい

ふ個人の能樂にむかつて動かさるべきで、個人を離れて、藝術の諸形式の内なる一の形式である能樂一般にむかつて動かさるべきではない筈である。若し能樂にそれが云へるものなら、俳句にでも和歌にでも、戯曲にでも小説にでも、およそ一切の藝術形式に就いて、同じ事が云へなくてはならない。然し一切の藝術形式は中性である。能樂のみが、其の除外例であり得る道理がない。

しかもすべての能樂師は、藝術形式としての能樂一般を、外の藝術形式とは全然違つて、一種神的なものであると、遠い過去から考へて來てゐるのである。——其處に、云はば論理の混亂がある。然し恐らくは又其處に、能樂を今あるやうな一種獨得な、寧ろ不可思議な藝術に造り上げた、一つの大きな理由が存在する。

能樂の發生起源の問題に關しては、専門の學者の間に、色々な説があるやうである。併し専門の學者が肯定するとならないとに論

天鈿女命
猿女君の祖

世阿彌
 觀世元清
 從五位下左衛
 門大夫
 (康正元年歿
 年八十一)

なく、能樂が天鈿女命に始まつて聖德太子に興り、而して神樂を其の父とするものであるといふ傳説は、十四世紀の末から十五世紀の半へかけての、世阿彌時代の前後から、能樂の家々では、確實なる事實であるかの如く、代々語り傳へられてゐたらしく見える。此の事は、惡意に解釋すれば、自家の職業を外にむかつて勿體らしく誇示する必要から、生まれたものであるとも考へられる。併し、單なる誇示の必要から生まれたものであると假定しても、既に宣言され、且意識される以上、此の事は、外にむかふと同時に内にむかつて、何等かの形に於て、其の當人に働き掛けずにはゐる筈がない。況んや、其の子孫に至れば、假令架空でも、さういふ架空は生きた現實になる。彼等が、其の起源の神聖の故に、自分達の前に置かれた能樂そのものをも神聖なものに考へ、神代の事や、聖德太子の事や、人を相手にしないで神を相手にする神樂の事やを、始終念頭に置いて、それを演ずる態度からして、嚴肅緊張を極めなくてはならない様に考へ始めるのは――若しくは、初めから嚴肅であつたものならば、更に其の嚴肅の度を高めなければならぬやうに考へ始めるのは――正に當然の經過である。

世阿彌の書いたものや、能樂の歴史に誌されてゐる二三の事實から想像すると、世阿彌時代の能樂は、今我々の前にある能樂よりも、遙に自由であり、且、創造的であつたやうに見える。其の表現にも、様式化されてゐたのは無論のことであるが、それでも多分に寫實主義的な要素が混つてゐたやうにも見える。さうして、今程の強度では、能樂が神聖視されてゐなかつたらしく思はれる。是は勿論、世阿彌其の人の考へ方が自由であつて、能樂といふ物をも、可なり純粹に、普通の意味での藝術として見る事が出来たからである。であるには違ひないが、一面當時の時代が能樂創成時代の盛期に

屬して、能樂界の空氣が亦自由で流動的で、且進取的であつた爲もあると思ふ。然し足利氏が滅び、織田豊臣を過ぎ、徳川政府の基礎が確立し、能樂が所謂武家の式樂となつて、將軍宣下や官位昇進や、婚禮や法事やの儀式に際して用ひられるやうになつた時には、能樂はもう大きな重い傳統を背負つて歩く、創造的ではなく守成的な、隨つて自由な所の少しもない、窮屈な藝術になり切つて了つてゐた。さうして特に此の頃から、能樂は極端に神聖なものとして、自他から考へられ、且取扱はれる様になつたものらしい。

式樂にされてから、能樂は、全然民衆から離れて了つたものらしい。芭蕉や近松や西鶴が出現して、異常な劃期的な仕事をした、十七世紀後半から十八世紀初頭へかけての藝術勃興の時期においてさへ、全く民衆から離れて了つた能樂は、かういふ氣運から大した刺戟を受けずに、たゞ消極的な藝道の所謂名人を多く出しただ

けで、再び世阿彌の様な偉大な仕事をする天才を生出す事も出来ず、一方から云へば、それ程重い大きい傳統を背負つて、ひたすらに堅くなり、ひたすらに内に充ちるだけで、今日に及んだやうである。

(能樂に就いて)

二三 まされる寶

思子等歌

山上憶良

しろがねもこがねも玉もなにせむに

まされる寶子にしかめやも

罷宴歌

憶良らは今はまからむ子泣くらむ

そのかの母も吾を待つらむぞ

沈病之時歌

山上憶良
大寶中入唐
(天平五年卒)

柿本人麿
歌聖
持統文武兩朝
頃の人

柿本人麿
(前賢故實)

をのこやも空しかるべき萬代に

かたりつぐべき名は立たずして

輕皇子宿于安騎野時作歌

柿本人麿

ひむがしの野にかぎろひ
の立つ見えて

かへりみすれば月か
たぶきぬ

○
近江の海夕浪千鳥なが鳴
けば

こゝろもしぬにい
しへおもほゆ



持統天皇幸吉野之日咏長歌并短歌
八咫和之吾大王之所聞食天下尔國若思也
澤雖有山川之清河内跡御心於吉野之國乃
花散相歌津乃野邊不宮柱太敷座波而破
城乃大宮人首船在氏日川渡舟竟夕河後此
川乃絶事幸久此山乃跡島良之味水繼瀧
之宮千波見體跡不能可爾
又歌
雖見飽叔吉野乃河之常津乃
絶事無久復還見乎

從近江國上來時至宇治河邊作歌

ものゝふのやそうぢ川の網代木に
いさよふ波のゆくへしらずも

山部赤人

○
春の野にすみれ摘みにと來し吾ぞ

野をなつかしみひと夜ねにける

幸紀伊國時作歌

○
和歌の浦に潮みちくればかたをなみ
葦邊をさしてたづなきわたる

○
ぬばたまの夜のふけゆけばひさぎおふる
清き河原に千鳥しば鳴く

大伴家持
旅人の子
(延暦四年薨)

歸雁歌

大伴家持

燕くるときになりぬとかりがねは
國おもひつゝ雲がくり鳴く

唐棣花歌

夏まけて咲きたるはねずひさかたの

雨うち降らばうつろひなむか

兪族歌

つるぎたちいよゝ磨ぐべしいにしへゆ

さやけくおひてきにしその名ぞ

應詔歌

海犬養岡磨

御民われいけるしるしあり天地の

さかゆるときにあへらく思へば

菅公

菅原道眞
(延喜三年薨
年五十九)

時平

藤原氏
(延喜九年薨
年三十九)

菅原道眞
(前賢故實)

二四 菅公の左遷

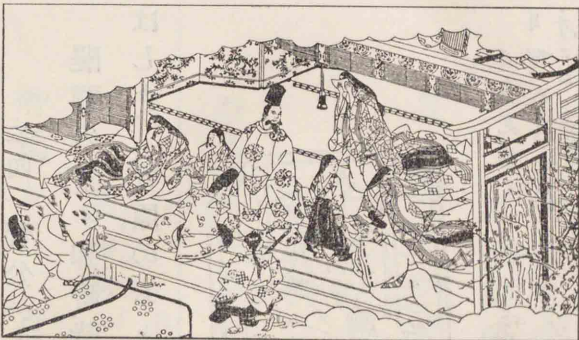
醍醐の帝の御時、時平のおとゞ左大臣の位にて、年いと若くておはしき。菅原のおとゞは右大臣の位にておはします。そのをり、



月夜見梅衣 菅公此年十一
月夜見梅衣 菅公此年十一
月夜見梅衣 菅公此年十一

みかど御年いと若くおはします。左右大臣に、世の政を行ふべき宣旨下さしめ給へりしに、そのをり、左大臣御年二十八九ばかり、右大臣の御年五十七八ばかりにやおはしけん、ともに世の政うちせしめ給ひしほどに、右大臣はさえも世にすぐれめでたくおはしまし、御心おきても殊のほかにかしこくおはしまし、左大臣は御歳も

配所に赴く菅公



若く、ざえもことの外に劣り給へるによりて、右大臣御おぼえ殊の外におはしましたるに、左大臣安からずおぼしたるほどに、さるべきにやおはしけん、右大臣の御爲によからぬこと出で来て、昌泰四年正月二十九日、太宰権帥になし奉りて流させ給ふ。

この大臣の子ども數多おはせしに、女君たちは壻取し、男君たちは皆ほど／＼につけて位どもおはせしを、それも皆方々に流され給ひて悲しきに、幼くおはしける男君、女君たち慕ひ泣きておはしければ、小さきはあへなんと、おほやけも許さしめ給ひしかば、ともにゐて下り給ひしぞかし。帝の御掟極めてあやにくにおはしませば、この御子どもを同じかたにだに遣はさざり

亭子の帝
第五十九代宇
多天皇

けり。方々にいと悲しく思召して、御前の梅の枝を御覽じて、

東風吹かばにほひおこせよ梅の花

あるじなしとて春なわすれそ

また、亭子の帝にきこえさせ給ふ。

流れゆくわれはみくづになりはてぬ

君しがらみとなりてとゞめよ

なきことにより、かく罪せられ給ふを、からく思し歎きて、やがて山崎にて出家せしめ給ひてけり。都遠くなるまゝに、あはれに心細くおぼされて、

君がすむ宿の梢をゆく／＼も

隠るゝまでにかへりみしはや

また、播磨の國におはしつきて、明石のうまやといふ處に御宿りせしめ給ひて、驛の長のいみじう思へる氣色を御覽じて、作らしめ

給へる詩いと哀し。

驛長無驚時變改 一榮一落是春秋

かくて筑紫におはしまし着きて、あはれに心細く思さるゝゆふべ、遠方に處々煙立つを御覽じて、

夕されば野にも山にも立つ煙

なげきよりこそもえまさりけれ

また、雲の浮きて漂ふを御覽じても、

山わかれ飛びゆく雲の歸り來る

かげ見るときぞなほ頼まるゝ

さりともと世を思しめされけるなるべし。月のあかき夜、

海ならずたゞよふ水の底までも

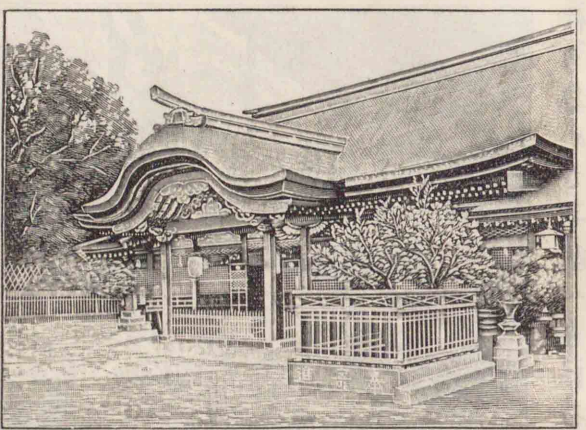
きよきこゝろは月ぞ照らさん

これいとかしこくあそばしたりかし。げに月日こそは照らし

大貳の居所
太宰府

太宰府天満宮

文集
白氏文集



給はめとこそはあめれ。

筑紫におはします所の御門も、固めておはします。大貳の居處は遙かな

れども、樓の上の瓦などの、心にもあらず御覽じやられけるに、又いと近く觀

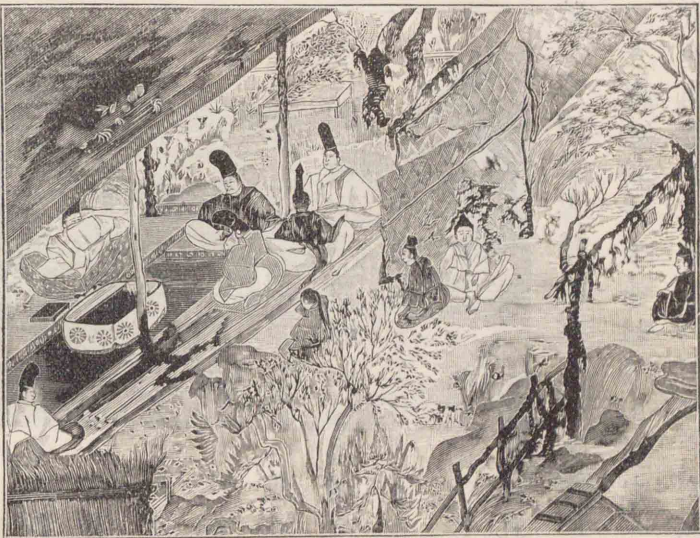
音寺といふ寺のありければ、鐘の響をきこしめして作らせ給へる詩ぞかし。

都府樓纒看瓦色
觀音寺只聽鐘聲

これは、文集の白居易が「遺愛寺鐘敲枕

聽。香爐峰雪撥簾看」といふ詩にも、まささまに作らしめ給へり」とこそ、昔の博士どもは申しけれ。またかの筑紫にて、九月十日菊の花を御覽じけるついでに、まだ京におはしましし時、九月の今宵、内

配所の菅公
(藤原信實筆)



作り集めさせ給へりけるを書き集め、一卷とせしめ給ひて、後集と

後集
菅家後集

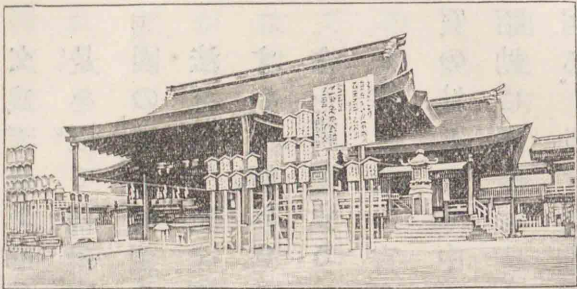
名づけられたり。また、をりをりの歌を書きおかせ給へりけるを、自ら世に散り聞えしなり。また、雨の降る日、うちながめ給ひて、

あめの下かわけるほどのなければや

着てしぬれぎぬひるよしもなき

やがて、かしこにてうせ給へり。

夜の中に、この北野に、そこらの松をおほさしめ給ひて、渡り住み給ふこそは、たゞ今の北野宮と申して、あらひと神におはしますめれ。おほやけも行幸せしめ給ふ。いとかしこく、あがめ奉り給ふめり。筑紫のおはしましどころは安樂寺といひて、おほやけより別當所司などなさせ給ひて、いとやんごとなし。(大鏡)



北野神社

二五 明・淨・直

五十嵐 力

文武天皇が即位の際に下された宣命の中に、左の詞がある。
 是を以て百の官人等四方の食國を治めまつれと任せ給へる國
 國の宰等に至るまでに天皇が朝廷の敷き給ひ行ひ給へる國の
 法を過ち犯す事なく明き淨き直き誠の心もちていやす、みす
 すみて緩み怠ることなく務め結りて仕へまつれと詔り給ふ大
 命を諸、聞食さへと詔る。(續日本紀卷一)

吾等は、此の宣命に在る「明き」「淨き」「直き」心といふのが、日本人の性質の核となり、中心となるものであらうと思ふ。此の語は、代々の詔勅に幾度も、繰返されて居る、而も重きをおいて繰返されて居る。世に大和民族の特性と稱さるゝ現實・光明・活動・向上・中庸・快活・忠孝・清廉・勇武・義俠・風雅等の諸性質は、概ね此の明・淨・直の三大性

を基本として説明されるらしく、殊には三種の神器が、此の三大性の標章として遺憾なきやうに思はれる。詳論の餘地なき故に、勢抽象的に流れるが、左に一とほり其の理由を説く。

鏡の性は明、その徳は玲瓏透徹に物を映すにある。日本人は、鏡のやうな明き心を以て正しく事物を觀た。故にその見方は、概して、公平無私で、赤い物は赤いとし、黒い物は黒いとし、善行に對しては我を忘れて歎美し、悪行を見ては敢然として排斥するといふ傾があつた。天照大御神は、鏡を齋きて、我が大御前を見るが如くせよと仰せられた。全國無数の神社には、その鏡が神體として齋かれてある。詔勅や祝詞や君臣應對の詞などに、「明き心」といふ語が澤山に用ひてある。是等は何れも、此の性質が我が國民の心底に根深く植ゑつけられた證據になると思ふ。我が國民の中庸性・折衷性・調和性も、一面此の根本性質の結果であらう。我が國には、政

治社會・宗教等の諸方面に互つて、諸外國に見るが如き非常な大衝突が無い。無いではないが、割合に少なく、又いつもよき程に切り上げて調和するといふ傾がある。例へば、異主義が新に外國から入つて来る。毛色が變つて居るので、暫くは争ふが、やがて御互に道理も無理もある事が解ると、馬鹿らしくて争論が續けられなくなり、騎虎の勢の意地喧嘩は止め、長短取捨の調停をする。萬事このとほりである。まづ儒教が入つて来た。至つて尤もな事をいふから、早速それを頼んで、我が固有の倫常に理窟をつけて貰ふ。かくて儒教は、長へに我が國風の忠實なる辯護人となつた。佛教が入つて来た。餘りに奇怪なので暫く押問答がある。やがて説き方の巧妙なのに打込むと、何等の芥蒂なく中心から歸依してしまふ。かくて遂に、兩部習合といふ利巧な調和案が成り立つた。武家の世になつては佛教を餘興扱して、老後の慰助命の口實と

する様になつた。基督教も二三度の喧嘩が濟んで、もうそろ／＼日本のものに成りかけて来て居る。あの位の騒ぎで明治の維新を見たのも、平和の裡に憲法を得たのも、君臣父子の親和も、萬世一系の國體も、一面皆「明」といふ基本的國民性の賜ではないか。馬上に天下を得た武將が、文藝の奨励に骨折るのも、武士が僧侶に親しみ、僧侶が武士につくすのも、乃至さつぱりと腹を切るのも、皆一つは事を見ること明かに、理に従ふこと流るゝが如き根本性によるのではないか。大和民族は、十字軍や佛蘭西革命の如き極端な狂態を演ずるには、餘りに心が明る過ぎる傾がある。吾等は、日本人を「公正」といひ、理に鋭し」といひ、感情の平靜を保つ」といひ、日本人は何事をも受け入るゝ胸懷洞然たる人種なり」というた外人の評が、決してでたらめの空世辭ではないと思ふ。

清淨の徳は、玉において絶好の標章を得て居る。淨と明とは似

ては居るが同じではない。其の異ふ趣は、丁度鏡と玉との異ふ趣に似て居る。汚穢・混濁を忌む事は清明共に同様であるが、清はそれ以上に味あり温かみある事を要する。譬へば、鏡は空白にして正しく物を映ずれば足るが、玉は必ずしも空白物を映すを要とせずして、温潤の光、圓融の相澄徹の趣あることを要するがごときものである。本来日本人は、明に事物を観る長所があるのみならず、外物を観るにも、自己を發表するにも、一種の味ある態度を具へて居た。其の明は空白の明ではなくして、温潤圓融澄徹の趣味を加へた明である。硝子の明ではなくして、水晶夜光珠の明である。我が國には古來襖・祓が多く行はれ、廣く用ひられ、且、重要視されて居た。祝詞・宣命をはじめとして、多くの歌詠・諷謠は明き心を現しながら、趣味・風韻に富んで居た。而も其の趣味や形容が諸外國例へば支那の文學に見る如き、張子の虎のやうな誇張の弊がなくて、

よく其の實を現し、中味に相應はしい修飾を纏うて居る、むくつけき武人にも、戦陣の間に花を翳し、歌詠を贈答し、或は胃に香を焚きしめるといふやうな嗜があつた。上流社會はいふに及ばず、市井の民に至るまで、それぞれ相應はしい文學を有つて居る。外國出稼の労働者が、其の日の生活に窮しながらも、猶一二の植木鉢を持たぬはなく、而してこれは外國の労働者に絶えて見ぬ所といはれて居る。大工・指物屋の手に成るはかなき家具や細工物も、西洋のが、表面のみ美しく裏面の粗末なのに反し、我が國のは、見えぬ裏面まで手をつくすといふ嗜があるといはれる。是等は何れも大和民族が、清きを愛する根本性の現れたものではないか。吾等は、「日本人は世界第一の審美眼を有する國民にして、貴族より労働者に至るまで皆美術を愛翫す」というた一外人の批評が、必ずしも虚妄でないと思ふ。

父母を
萬葉集 山上
憶良の歌句

海行かば
萬葉集 大伴
家持の歌句

直は正を意味し、勇を意味し、決斷を意味し、直前直往を意味する。其の厭ふ所は躊躇緩慢、首鼠兩端である、曲ること、拗ること、邪なることである。叢雲の劍は、其の標章として此の上なく相應はしい。元來、直の徳の本領は、心のあきらかに見た所に向つて直前するにある。若し右の三徳を一括して之を一體と見れば、明は其の靜的方面即ち知の方面で、直は活動方面即ち意の方面である。知のあきらかに見たる所をば、意が直進して實現する、而して知の見方、意の働き方に、潔くして言ひ知らぬ味のあるのが、邦人固有の性格ともいふべきであらう。明き心を以て、父母を見れば尊し、妻子見ればめぐし愛し。故にその明き心の示すところに従ひ、直前して父母に事へ、妻子を愛しむ。君を仰げば、八隅知し大君「現つ神」として國に臨みたまふさまが、かぎりなく高く貴い。故に直前して、海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍の獻身的奉公をいたす。しかし

其の君父に事へ妻子を愛するや、多くは水臭い思慮分別利害勘定の結果ではなくして、直實掬すべき趣があつた。此處が、眞淵宣長等の國學者が感歎し自負して措かなかつた所である。無論何處の國にも、文化の進まぬ時代には、かやうな自然的の所があつたであらう。又日本民族にも、利害勘定の行爲が無かつたとはいはれぬであらう、又自然直實の行爲に、弊害が伴なはぬともいはれぬであらうけれども、我が民族の特長の一面は、とにかく此處に在つたやうに思はれる。其の例は、遠い昔では須佐之男命、勝ちすさんでは前後を顧みず、皇祖に存分いたづらして高天の原を震動される、罪さるれば命を畏みて邊土に行かれる、出雲では櫛名田姫の不幸を見て、危険をも顧みず、すぐに八俣の大蛇を退治される、寶劍を得ると、これを曩に敵なした天照大御神に上られる。行り方がいかにもはきくきびくとして、直斷決の文字そのまゝのやうで

はないか。ついでには倭武尊、相手を搦み批いで手足を引つかいて、薦に裏んで投げ棄てるといふ勢の方でありながら、一たび詔を承れば、劍に仗り、千里を獨往して、東西の兇賊を平げられた。これ亦須佐之男命系統の勇者である。それに續いては、鎮西八郎爲朝が、腕白、勘當、九國押領、召還、保元の勇戦、大島配流の一生、これも須佐之男系の大立者。是等は何れもむかふ見ずの亂暴者でありながら、妙に情に厚い所があり、君父の事とあれば、水火も辭せず、直前するといふ風がある。直斷決勇の權化で、たしかに大和民族固有性の一面を背負つて立つヒーローである。その他蒙古の來寇に、西海の將士が身命を棄てて防戦した態度を見よ。

千萬の軍なりとも言擧げせず
取りて來ぬべきをのことぞ思ふ
代々の武士の斷乎たる覺悟を見よ。 畠山重忠・加藤清正の如き竹

千萬の
萬葉集 高橋
連蟲磨の歌

を割つたやうに正直な豪傑の、國民に尊崇さるゝを見よ。曾我五郎朝比奈三郎の如き一徹者の、國民に愛さるゝを見よ。豁然大悟の禪宗が、盛んに行はれたるを見よ。
是等は、いづれも直きを好む性質が、大和民族の心性の基本精髓を成して居る證據ではあるまいか。(新國文學史に據る)

二六 日本文學

芳賀 矢一

優美閑雅な日本語を使つて、平和柔順な國民が歌つた歌、それには長歌も短歌もあるが、これ等の歌が、日本文學の基礎といつてよろしい。四圍の美しい自然を歌つて、人事もすべて自然の譬喩に寄せられてゐる事が、早く後世の文學の特質を示して居る。古事記・日本紀の歌、萬葉集の歌等は、即ちそれ等の國民歌の幾分かを傳へたもので、推古以來支那の文明が傳はつて、段々と漢文漢詩が行

はれるやうになつても、日本固有の歌はそれとは別途に發達した。殊に、祝詞の形式を應用して、寧ろ漢詩に對抗して、特殊の國民思想を歌つたのが柿本人麿、山部赤人等の先輩歌人で、續いて奈良時代の大伴家持である。萬葉集には漢文渡來以前の歌も多く載せてあるが、かういふ新進歌人等の歌もすくなくない。優美・典雅といふ點において、忠君・愛國の思想において、よく日本國民の上代思想をあらはしたものである。

奈良時代に出來た萬葉集は漢字を以て記された。漢字の音訓を用ひて、日本語を記したのである。平安朝になつて百餘年の間に假名の發達があつて、平假名で自由自在に國語を記す事になつた。こゝにおいて、假名文の發達が著しくなつた。萬葉集の後をついで、古今集以下の勅撰和歌集が出來たのみでなく、竹取物語、伊勢物語を物語の祖として、數多の假名物語、日記、隨筆の類があらは

れた。就中有名なのは紫式部の源氏物語と清少納言の枕草子で、漢學の素養が、文藻を助けたことは見逃されぬことであるが、上古以來行はれた和歌の風流が、常にこれ等の文學の背景となり、基礎となつて居るのも、また争はれぬ事實である。大鏡や榮華物語などいふ史實を記した物語も、つまりは其の材料を一轉化したのである。奈良時代の和歌即ち抒情詩が、平安朝時代には物語即ち叙事詩と發達したのである。

鎌倉幕府の創立と共に時代は一變した。随つて文學も一變した。源平二氏の争が材料に採られた、保元物語や平治物語や源平盛衰記などといふ軍記物語が、佛家の諸行無常、愛別離苦の思想の下に筆述せられた。降つて吉野朝廷の頃の太平記も、同じく軍記物語である。平安時代の盛時とは、其の材料においてこそそれぞれ差別はあれ、叙事詩たる事は同様である。材料の變化と共に言

語も變化して、漢語及び漢文脈の加はつて來た事は、自ら其の内容と外形との調和を保たしめて居る。徒然草、方丈記なども、佛教の深い感化から生まれた、此の時代の著名な産物として數へられる。

足利義滿



足利義滿

平安鎌倉二時代を通じての叙事詩は、こゝに至つて劇詩の形をなしたのである。能は其の後、徳川時代を通じて衰へず、今日に傳はつてなほ盛んであるのを見ても、如何に我が國民の嗜好に投じた

足利將軍の世は概して戰亂時代で、無學の世と稱せられて居るが、明朝との交通繁く、繪畫をはじめ美術・工藝の進歩の著しきものあり、ことに將軍義滿の頃に至つて、能の發達大成を見るに至つたのは、大いに注意すべき事である。

ものであるかがわかる。其の材料としては、上代の萬葉集から、中古の古今集、伊勢物語、源氏物語等は勿論、平家物語、源平盛衰記、又、義經記、曾我物語などの軍記物語に及んで居り、又、世話材料もとり入れてある。歌ふ方から言つても、舞ふ方から言つても、出来るだけ當時の粹を抜いたもので、まさに其の精華を集めたものである。あらゆる藝術の方面を集大成したものととして、當時の武士の修養に資したことは多大であつた。

徳川時代に至つては、學問の復興から、漢文學の精華たる唐宋時代の詩文の研究は勿論、儒學においては、支那においても稀な程な大儒が輩出した。又、國學の研究も盛になつて、久しく忘れられて居つた平安時代以前に遡つて、萬葉集も研究せられ、源氏物語も研究せられた。印刷の方法も進み、古書の翻刻が盛になつて、庶民みな太平の世を楽しんで、靜に文學を翫味するの餘裕を得た。漢學

徳川家齊



國學の勃興につれて、専ら平民社會に行はれた所謂俗文學が發達した。淨瑠璃や小説や俳句や狂歌や川柳やが、和漢古今の文學に根ざし新しい國民思想の花を咲かせた。昌平時代の樂天洒落な氣風と、義理人情に勇み立つ犠牲的精神とが、これ等各種の文學の上に溢れて居る。綱吉將軍の元祿時代と家齊將軍の文化・文政時代とが、其の最大繁盛な時世であつた。淨瑠璃の近松門左衛門、俳句の芭蕉は元祿の世に屬し、小説の曲亭馬琴は文化・文政の世に屬する。其の他作家は數かぎりもない。平民社會の嗜好に投じた爲、中には材料・思想に鄙陋なもの尠くないのは遺憾である。演劇の發達の著しか

つたことも、注意すべき事柄である。かやうに平民文學の發達したのは、一面において平民社會の勃興を意味するので、日本の國民が明治・大正の御代を待つて、大いに世界に活躍するといふ氣運が、已に其の上に示されて居る様に感ぜられる。

維新以後の進歩は、ひたすら西洋文學の新味を加へた事で、東西文明の融和は我が國文學の上においても、いち早く認められるのである。最初は平易な英文の小説・詩歌の翻譯から始まつて、次第に佛・獨・露・瑞諸國の文學を咀嚼するに至り、歐米の新思想は抒情詩・叙事詩・劇詩の各方面に互つて、常に新しい傾向・生命を我が文學の上に及ぼしつゝあるのである。上古以來の國文學の研究も益盛になつて、一層根柢あり、權威あり、價值ある文學の興るのは、近き將來に期待せらるべき事である。但、新奇を競ふのあまり、往々我が國體と相容れず、我が國民性と扞格する思想の輸入せられる事も

あるので、其の間の調節は大いに考慮しなければならぬのである。

和昭
國語讀本卷十終

昭和三年九月二十三日
昭和四年九月二十三日
昭和四年一月十七日

和昭國語讀本全十冊

卷數	定價
一 五三	金六六
二 四二	金六六
三 三二	金六六
四 二二	金六六
五 一三	金六六
六 〇三	金六六
七 九	拾九
八 八	拾九
九 七	拾九
十 六	拾九



編者

笹川種郎
關根正直

發行者

株式會社帝國書院
代表者 增田啓策

印刷者

東京市京橋區銀座西二丁目三番地
高橋郁

發行所

東京市神田區西神田一丁目三番地
株式會社帝國書院
振替口座東京六七〇一四番

關西販賣所

大阪市東區橫堀町四丁目三番地
三宅莊藏書店
振替口座大阪六九番

縣立比原實業學校
 第三十年
 高田薰

第一 第二 第三 第四 第五 第六 第七 第八 第九 第十	<table border="1"> <tr> <td> </td> <td> </td> <td> </td> </tr> <tr> <td> </td> <td> </td> <td> </td> </tr> <tr> <td> </td> <td> </td> <td> </td> </tr> </table>										第十一 第十二 第十三 第十四 第十五 第十六 第十七 第十八 第十九 第二十

庫
29
29

広島大学図書
2000040729

